

論 文

心理臨床における現代的問題へのアプローチとしてのユング理論の再検討

京都大学大学院教育学研究科附属臨床教育実践研究センター

准教授 松 下 姫 歌

Reinterpreting Jungian theories as an approach to contemporary problems
in clinical psychology

MATSUSHITA, Himeka

キーワード：自他未分、主体としての無意識、自我と自己の関係

Key Words: unestablishment of the self as distinct from others, the unconscious as subject, the relationship between ego and self

第 1 章 問題と目的

1 心理臨床における現代的問題 1 ー主体性と内面性

近年、「内面的なアプローチが通用しないケースが増えてきたのではないか」という声が聞かれるようになった。クライアントの抱える問題について、具体的なエピソードやその体験、あるいは自身の感覚や情緒などについての本人の語りが乏しかったり、そもそも主訴がわからなかったり、困り感や切迫感が感じられないケースが増えてきたと言われるようになった。こうしたあり方は、具体的なレベルで「想像」したり、自分自身の心を通じて「体験」したり、具体的に「想起」したり、それらを心に思い浮かべながら「内省」したりすることの難しさの表れと見なされる傾向がある。「主体性」や「内面性」の表現の乏しさは、主体性や内面性を支える「自我の脆弱さ」や「心的現実感(リアリティ)をつかむ力の乏しさ」と見なされることも多い。そして、このような、「具体的なイメージ」が語られにくく、「主体性」と「内面性」の乏しい、「自我の脆弱さ」のある場合には、内面を主として扱うようなアプローチは不向きなのではないかというのである。

この点に関し、田中(2017)は、心理療法の「対象」は、「それぞれの時代や文化、そして社会との相関において規定されるものであり、その意味で極めて動的で変転するものである」とし、そのような「新

しい時代精神の産物」に対して「従来の心理療法がもっていた『前提』をよく見直す必要がある」と指摘している。そして、近年とみに問題視されることの増えた「解離」や「発達障害」は、「主体性」「内面性」といった、従来の心理療法が前提としてきたものを「無効化」しているとし、それらを前提としたアプローチを押し付けるのではなく、それらの前提そのものを見直し、心理療法そのものが抜本的に問い直される必要があるとしている。このことは、「主体性」「内面性」を前提としてきた心理療法的立場(オリエンテーション)が無効である、ということではない。その立場において、それらの「前提」を問い直す必要があるということである。

それでは、「前提」をどう見直すのか。

この点が重要である。まず、「主体」や「内面」といった個々の概念で捉えてきたものを見直し、それらを含む、前提としてきた視野と視点の見直しが必要である。つまり「従来の」概念理解のあり方にある種の不足があるからこそ、通用しないケースがあるということである。「主体性」や「内面性」という、それぞれのコトバで、何を見ているのか、どこからどこまでを含めて考えているのか、というパースペクティブの問題であり、そこを問い直す必要があるということである。例えば、何を指して「主体」と呼んでいるのか、何を「内面」と見ているのか、なぜ「内面」というコトバを選んでいるのかといった問題がある。これらはいずれも、実のところ、相当に視野・視点のあり方に幅があるものと考えられる。さらにいえば、それぞれの心理療法理論における「主体」や「内面」の概念にあたるものについて本質的に問い直す必要がある。

2 心理臨床における現代的問題 2 -発達障害的であること

一方、冒頭に掲げた問題については、クライアントの問題に関する近年の変化として語られがちであるが、セラピスト側の要因も絡んでいる可能性はないだろうか。もっと言えば、社会全体としてのあり方そのものが、クライアントの問題の変化を後押ししていたり、クライアントの問題という形で反映されていたりする可能性はないだろうか。そして、「内面性」「主体性」の乏しさが問題視される近年の傾向(トレンド)において、「主訴」「具体的なイメージ」「困り感」等がクライアントから語られにくいことに対する、セラピスト側の構えがどこか変化していたりはしないだろうか。この点についても少し考えてみたい。

確かに、医療や教育や福祉など、さまざまな領域の心理臨床現場で「主訴が見えにくい」ケースにはよく出会う。しかし、考えてみれば、それは今に始まったことではない。主訴が見えにくいのは、心の問題であればむしろ自然で、明確すぎる主訴の方が不自然なくらいである。主訴の見えにくさは、そのクライアントの特徴や問題の一部を示しているかもしれない。しかし、それをことさらに問題視するのは、どこか不要な障壁をわざわざクライアントとの間に立てているようにすら思える。問題をわかりやすく単純化して見ることができるのは、他者視点だからであり、生きている本人の心にとってはそうはいかない。傍からは窺い知れない複雑性と潜在性がある。その複雑性の中に、他者や集団との共通項では捉えることができない、個人の生の重みがある。潜在性は、個人の生の過去と現在だけの問題でもない。未来へ向かうひそかな動きから生まれる問題もある。その個人の心の生とその複雑性・潜在性を扱うのが、心理療法をはじめとする心理臨床の実践である。だからこそ、クライアントの複雑性を秘めた

潜在的な主訴を、端から決めつけずに受けとめていくことが求められる。

「具体的なイメージ」が語られにくく、「主体性や内面性が乏しく」、「自我が脆弱」に見えるケースにもよく出会われる。これも今に始まったことではない。さまざまな心身の基盤と問題を背景に、バリエーション豊かに、こうしたケースは存在してきたし、心理療法において取り組まれてきた。しかし、近頃は、こうした「自我が脆弱で、内面が語られにくい」ケースが問題視される。加えて、この問題は、しばしば、発達障害と結び付けて言及される。特に、ウィング Wing, L. (1995, 1997)が提唱した「自閉症スペクトラム autistic spectrum」における3つ組の障害の概念、すなわち、「社会性」、「コミュニケーション」、「想像力・こだわり」の障害に代表される、自閉症関連領域の問題と結びつけて語られることが増えている。

3つ組の問題として指摘されている特徴は、現代社会において、例えば「空気の読めなさ」として捉えられがちである。野間(2012)は、現代においては、「『空気が読めない』ことを理由に集団から弾き出されるようになってしまった」が、「かつてはそういう人が集団に居場所を見つけていたものだった」ことを指摘し、「『空気を読む』ことを要求されるということは、じつは現代では集団内で『空気を読む』ことが難しくなり、『空気が読めない』人が増えてきた証拠である」と述べている。つまり、現代社会全体が、いわば「発達障害」的になってきているために、「発達障害」的なものが問題視されるようになっている、と言うのである。

野間(2012)は、「発達障害」の特徴を「周囲への硬直的な警戒」として抽出しているが、これはそのまま、現代社会の特徴でもあるとしている。現代社会が、情報文化の飛躍的發展を背景に、距離を保ったコミュニケーションが容易になった一方、リスク管理とマニュアル化を進めることで、逆説的にリスクに対する脆弱化が進み、マニュアル外のことがあるとフリーズしてしまうようになったとしている。そして、精神医学も例外ではなく、緻密で繊細な人間観察を通して病理の見立てと方針を導き出すことよりも、診断マニュアルと治療ガイドラインによって、一定の症状が揃えば診断名が下され、有効とされる治療法が選択されるといったあり方に急速にシフトしたことで、特有の弊害が生じたことを示唆している。さらに、これらの現代社会の特徴は、「情報通信手段の進化を背景にした、未知なるものに対する特有の『警戒』」に由来する「『コミュニケーション障害』と『固執傾向』以外の何物でもない」とし、「現代という時代こそが、『発達障害化』している」と論じている。そして、そのような硬直した社会が自然な対人交流を阻み、他者との愛着関係を歪め、そのことが素因をもつ者には負荷の増大をもたらし、発達障害傾向が増大するのではないかと推論している。

彼の主張を、筆者なりにかみ砕いて言えば、現代社会とそこに生きる人々に、「発達障害」的なものを「抱える」力や、「発達障害」的なものに「寄り添い」「関係をもつ」力が乏しくなってきたからこそ、「発達障害」的な素因が高い人にしわ寄せが生じているということと理解できる。それは、現代社会に生きる人々が、自らの「発達障害」的な面に対しても関係をもつことが難しくなっているということでもあると考えられる。だからこそ、「周囲への硬直的な警戒」が増幅され、ルールや指針やマニュアルを求め、それから外れるような「想定外」や「未知」に極めて脆弱になっていると考えられる。例えば、道（未知）を進む中で、さまざまな関わりや体験の中に知恵が見いだされるというよりは、道を進む前に未知に備えてスペックを取り揃えることが前提となっている、ゲームや課金システムに似たあり方が、

もはやデフォルトと化しているようにも見える。

さらに、野間(2012)は、「精神に立ち現れる表象内容」は、「生物学的基盤を下敷きにしながらも、同時にその個人の来歴を背景としつつ、そのつどの周囲環境からの影響を受けて成立する。表象内容はつねに、主体が置かれたその時代その文化の影響のもとに置かれている」とし、だからこそ、精神疾患においては、基礎にある本質病理が同じでも、時代や文化に応じて症状の表れ方が異なったり、生物学的基盤が異なるさまざまな疾患や障害が同じ特徴を帯びたりすることがありうると指摘し、近年は、さまざまな精神疾患において、周囲への警戒が高く、信頼感を築くことが難しく、ストレス回避的で訴えが少ない、といった同型が見られるとしている。

こうした近年の精神科診療における患者に見られる特徴は、冒頭に述べた、心理臨床において指摘されることの増えた特徴と合致する。さらに、この特徴は、大学の学生相談の分野で1990年代に突入する直前、1980年代の終り頃から、大学生の「内省」の乏しさ(西平, 1988)、「対人関係の希薄さ」や「ふれあい恐怖」、「親密さの回避」等(山田・安東・宮川・奥田, 1987; 岡田, 1988, 1989, 1993)として指摘されるようになった特徴とも重なる。もともと、30年前に指摘された特徴が、近年さらに鋭角さを増し、結晶度が高まっている印象があるが、現代社会の特徴の萌芽が、すでに30年前から広く見られ、準備状態を形成していたことを物語るものでもある。

3 心理臨床における現代的問題 3 一関係の接触障害

心理臨床とセラピストのあり方の問題に話を戻そう。

それにしても、自閉症スペクトラムをはじめとする発達障害や、内面性・主体性が乏しく見えるような問題へのアプローチにおいて、心理療法の側があたかも「苦手意識」をもっているかのように語られるようになったのは何故だろうか。同様の問題であっても、かつてと近年では異なるのだろうか。

確かに、心理療法あるいはより広く心理臨床の現場において、クライアントに接する際、「これは新しいな」、「これまでこういうことはなかったな」ということは、もちろん、ある。しかし、心の苦しみや困難は、自分が自分であることの揺らぎに由来する、究極の個人的問題であるため、新しい点がない方がおかしい、とも言える。

とは言え、近年特有の傾向というものも確かにある。クライアントの内面に、従来とは少々異なる「触れにくさ」や「接点の持ちにくさ」、「アクセスのしにくさ」といった、いわば「関係における接触障害」とでもいうような感覚を抱く点であろうか。クライアントと接した時に、ある種の「平面(フラット)感」や「上滑り感」を感じたり、その人ならではの感覚や視点のかけらのようなものに触れるまでに一手間が必要だったり、クライアントの内面性や主体性が垣間見られた、そういう面に触れた、と思っても、ずっと振り出しに戻るような感覚を覚えることがある。

冒頭で示した近年の心理臨床の現場におけるケースの傾向として指摘されていることや、野間(2012)の指摘する現代の精神疾患に見られる表現型の傾向として指摘されていることの中には、セラピスト側に生じるこうした「関係における接触障害」の現象とその体験が含まれていると考えられる。そして、セラピスト側が、こうした体験を、クライアントのもつ発達障害的要素の一端として受け取った場合、それが的を射ていることもあれば、そうでないこともありうるだろう。「関係における接触障害」として

述べたような現象を、クライアントの「発達障害的要素」に由来するものとしてのみ捉えてよいのだろうか、という疑問が残る。これまで述べてきた、現代社会の問題としての議論を踏まえればなおさらである。

実のところ、第一に問題になっているのは、セラピストがクライアントの主体性や内面性に触れにくくなった、関係がつけにくくなった、という点である。セラピストにとってそうだからと言って、それがそのまま、クライアントの問題であると断じるのは早計である。そこには、それがクライアントの問題の性質である可能性や、そのような印象を与える性質を有するクライアントが増えたという可能性も含まれるが、それだけでなく、セラピスト側の理解や関わりのあり方に課題があるということが含まれ、両者の相互作用によるすれ違い的な問題も生じている可能性もあるのではないだろうか。

心理療法や心理学的アセスメントをはじめとする心理臨床における「データ」は、セラピストの心的パースペクティブによって違ってくる。どこまでを心の視野に入れ、どこに心の視点を向けるかによって違ってくる。それをどんな概念で捉えるかによっても違ってくる。したがって、何を「エビデンス」と捉えるかとか、どんな「エビデンス」を擦り合わせるかといったことも違ってくる。

まず問われるべきはセラピストの心的視野であり視点であり、セラピストはいったいどこを見ているのかを自覚し、セラピストが見ていなかったものの存在に気づくことである。それには、例えば、逆転移と呼ばれてきたようなものももちろん含まれるが、それだけでなく、単に知らない・体験していないもの、わからないこと、未知、に対する構えが問われる必要がある。セラピストには「わからなさに耐える」力や、「想定外の未知」に対する開かれた態度が必要である。しかし、そのつもりでいても、自分が生きて培ってきたものの見え方や、自分が学び培ってきた専門的な見地における「想定内の未知」にばかり開かれて、「想定内」で理解できることを期待してしまっていることも、往々にして生じがちなのではないだろうか。他者に開かれ、個別性と普遍性を見出していくためには、そのような、「これまでの」見え方に縛られるのではなく、その見え方を破りつつ「いま・ここ」に開かれ出会っていくことが必要である。そうでなければ、従前のモノの見え方や専門的理解の枠内にクライアントやケースの問題を押し込んで回収してしまうという本末転倒な事態に陥ってしまうということではないだろうか。

単に「発達障害」か否かといった、クライアントの側の問題だけではなく、セラピスト側のモノの見え方や専門的視野・視点の「想定外」に開かれる形で、“「主体性」・「内面性」の乏しさ”とうつつ問題のスペクトラムを視野に入れることが重要である。それに加えて、「主体」や「内面」の概念を問い直し、これまでの「専門的な」パースペクティブや理解と対応を見直すことで、クライアントと問題の実像によりよく迫ることができるのではないだろうか。

4 心理臨床における現代的問題とユング理論

こうした心理臨床における現代的問題にアプローチするうえで、ユング Jung, C. G.の理論は有用である。彼の心の理論は、生きる主体を無意識的な自己の側におき、意識的な自我は、無意識的な自己から生まれるものとしてとらえる立場である。したがって、意識的自我の統制が外れやすい、あるいは、意識的な自我の確立に脆弱性がある、という意味合いで、主体性や内面性が乏しいとされるようなケースについても、むしろアプローチの対象となりうる。また、上記のセラピストの問題のように、いったん

確立されたと見なしうるモノの捉え方とプロセスそのものもアプローチの対象となる。心が言語化の背後にある、ミクロの次元で、どのような心的体験をどのようにキャッチしているのか、どのようなイメージが動いているのかを、多次的・多視点的に見ていくことが可能であるという点は、ユングの理論とアプローチの特徴と言える。

ただし、ユングの心的危機論はいったん自我確立を果たしたはずの中年期のうつ病をベースにした説明に留まっており、自我が脆弱な場合についての説明は不足している。無論、1952年のクロルプロマジンの登場より前の、ユングの時代における統合失調症をとりまく状況は、現代とはずいぶん異なっており、心理療法の対象としてはおろか、薬物療法も含め、治療の手立てが十分でなかった。そのような中で、統合失調症を治療可能性のあるものとして捉え、治療実績もあげていたブロイラー-Bleuler, E.の下で学んだユングは、統合失調症への薬物療法がまだ主流でなかった時代に、心理学的了解の可能性を拓く先駆的な一連の論文を発表している(Jung, 1907, 1908, 1915/1989)。その中で指摘されている統合失調症の下位分類についての記述には、最近注目されている問題への指摘に重なるような指摘も散見され、その観察眼に改めて驚かされる。しかし、まだまだ、統合失調症に対する薬物療法と心理療法と言えるものが、ある程度確立されるよりずいぶん前の段階であったのだ。

本稿では、ユング理論の再検討を通じて、自我の脆弱性や、自我の確立そのものが問題になる場合についての理論とアプローチについて提言する。従来の自我確立を前提としたアプローチに対して、自我確立以前の「ゼロベース」のアプローチとあえて呼んでおこう。

また、ユング心理学は、深層心理学の一つに数えられてはいるが、心全体が未知に開かれて物事を捉え体験していく機能そのものに軸足を置いている。家族歴や成育歴等の外的現実にまつわる要因を重視していないわけではないが、絶対視もしていない。付け加えて言えば、心理臨床の現場においては、それらの情報がどこからも得られないケースも少なくない。そのような外的情報に頼って問題理解を進めるというよりは、あくまでクライアントの心にどんな性質のイメージ体験が動いているかの方に軸足がある。ユング理論はこうした、外的要因という、本質的には「誰かからの見え方」による要素を、本人の心の体験と混同しないように注意深く区別する立場である。こうした、あくまで本人の心全体による捉えや体験をベースにするという意味でも「ゼロベース」のアプローチと言える。実は、心に向き合う余裕を失いがちな現代社会に生きる人に適したアプローチなのではないかと考えている。

5 本稿の目的

以上を踏まえ、本稿では、現代の心理臨床において課題視されることが増えた、「主体性と内面性の乏しさ」や「自我の脆弱性」にまつわる問題へのアプローチについて考えるために、ユング Jung, C. G. の分析心理学の理論について再検討をおこなう。ユングの論においては、本来的な主体を無意識である自己の側におき、一般に意識される主体である自我は、自己から生まれるものとして捉えられている。そのため、主体性や内面性が乏しく、自我が脆弱な場合も、むしろアプローチの対象になりうる。ただし、ユングの心的危機論は、直接的な説明としては、自我がいったん確立されたうえで生じる危機を扱うにとどまっている。

そこで、本稿では、ユングが直接言及している範疇にとどまらず、彼の理論に内包される視点を敷衍することによって、主体性と内面性の乏しいとされる、自我の脆弱性にまつわる現代的問題の理解と対応について有用な視点を描き出すことを目的とする。

そのために、具体的には、大きく 2 部構成で、以下について論じる。第 1 部では、主に、従来のユング理論の再検討をおこなう。まず、第 2 章でユングの心の概念についての再検討をおこない、一般に誤解されがちな点について、ユングの視野と視点の本質を明確化するべく論じる。第 3 章では、従来のユングの心的危機論を心的危機論 A とし、事例を端的に提示しつつ、論の中核について論じる。第 4 章では、心的危機論 A をユングの心の概念に照らす形で、心的危機論の再検討をおこなうとともに、精神病理学における木村敏の自己論および存在構造論に照らすことで、ユングの心的危機論を精神病理との関連でも捉え直す。第 2 部では、第 1 部の議論を踏まえた上で、第 5 章で、心理臨床における現代的問題である「主体性と内面性の乏しさ」や「自我の脆弱性」にまつわる問題について論じる。第 6 章ではゼロベース・アプローチとしての心的危機論 B について論じる。

第 1 部 ユング理論の再検討

第 2 章 ユングの分析心理学における心の概念とその再検討

1 ユングにおける心の概念

ユング Jung, C. G. は、スイスの精神科医にして心理学者であり、「分析心理学 Analytical Psychology」の提唱者である。彼は、精神分析を提唱したフロイト Freud, S. と互いに影響を与え合いつつ、独自の心理学理論と心理療法を探究した。精神分析と分析心理学は、ともに深層心理学や力動的な心理療法の代表格として捉えられており、無意識を前提とするなどの共通点も少なくないが、分析心理学における無意識や自我等の概念は、精神分析におけるそれぞれの概念とは少々異なるものとして捉えられている。そこで、まずは、ユングの心の概念について、あらためて再検討したい。

1.1. 自己と自我／無意識と意識

ユングの思想の中核は、自己 self は、自己自身になること、すなわち、「個性化 individuation」を求めるといふものである。彼の言う個性化は、一般的な意味での個人主義や利己主義ということとは全く異なり、本来的自己の個別的な存在としての実現を求めるといふ意味での自己実現を指す(Jung, 1928-1943/1953)。

彼の言う「自己」は、普段、われわれが「自分」や「私」として捉えているもののことではない。それらは「自我 ego」と呼ばれる。すなわち、自我とは、意識的に把握される心の領域やはたらきの全体および中心のことであり、ユングにおいては自我と意識 conscious はほぼ同義である(Jung, 1951/1959)。また、一般的な意味で「心」や「主体」と呼んでいるものが指しているのは、自我や意識にあたると思われる。

一方、ユングにおいては、「心」や「主体」の本体を「無意識 unconscious」として捉え、「自己」と呼んでいる。心すなわち自己は、意識されないうちに常にはたらいており、さまざまな刺激や情報をキャッチしている。よくキャッチされた、いわば光が当たるようになった内容やはたらきが意識であり自我であると考えられている。つまり、自我は自己の一部である。したがって、ユングにおいては、自己とは、無意識と意識からなる心全体でありその中心である、と定義されている(Jung, 1951/1959)。

ここで、ユングにおける無意識とは、意識されない未知の心の内容やはたらきを指す。フロイトの精神分析においては、意識すると心の安定が崩れるような心的内容を意識の外においやる、抑圧などの防衛機制が働くと考えており、そのような、意識生活を守るためのはたらきや、それによって意識されない心的内容を主に無意識と呼んでいる。ユングは、無意識には、フロイトの言う無意識も含まれるとしているが、過去の心的体験の抑圧、という過去方向の無意識だけでなく、未来方向の無意識、すなわち、単に未知であるために意識されないものも含まれるとしている(Jung, 1928-1943/1953)。

このように、ユングにおいては、自己とは、それまで自分としてつかみとってきた、意識できる自分のみを指すのではない。我々が普段「自分」と感じている意識面である自我は自己から生まれたものであり、心のごく一部である。自己は、自我がこれまでの自我を超えて、未知の自己を見いだすべく方向付けていく力である。いわば、自分でありながら自分を超えていく力である。つまり、自己は、過去から現在までの次元だけでなく未知の次元を含めた、自己全体のありようを捉えつつ、自己自身を動かす力であるといえる。

1.2. 心の本体としての無意識：自己

このように、ユングの理論は、本来の主体を、自我でなく自己の側に、意識でなく無意識の側に置いているところに大きな特徴がある。心は最初から意識されるものとしてあるのではなく、本来的には無意識であり、意識的な自覚の有無にかかわらず、生きる世界に生じていることをつかむべく、常にはたらいている、と捉えられている。この点について、そもそものところを考えると、ユングの論に限らず、心理学のさまざまな理論においても、心と呼ばれているはたらきは、元来、生きものが、モノを把握し、対応し、生き抜いていくための力と捉えてもよいのではないだろうか。そのような心のいとなみを繰り返しつつ生きていく中で、心によりよくつかみとられたものが、意識となり自我となっていくと捉えてよいだろう。

まとめると、自己である無意識は、常に環界や対象にアプローチしているという意味で「(無意識的な)はたらき」であり、それによって「捉えた」ものを含むという意味で「(無意識的な) 心的内容」でもある。このうち、いわばよく光が当たるようになった、よく捉えられるようになったはたらきや心的内容が自我と意識になるわけだが、これらは自己の一部でもある。したがって、自我は意識領域における主体であるが、自己は、自我を超えたところで心全体を捉えている、もう一つの主体であると言える。自己は、無意識と意識の両方にまたがっているために、自我の目が届かないような大きな視野をもつ、もう一つの大きな心の目のようなものであり、その意味で、心全体をとらえるスーパーヴィジョン機能と考えることができる。

2 自我が成立する以前の心の次元

このように、ユングにおける心の概念そのものは、「自我が成立する以前」の、「自我と非自我が未分化」な心の次元をベースに置いている。

現代において指摘される主体性と内面性の乏しさの問題は、言い換えれば、自我のある種の脆弱性の問題を指摘するものである。一般的にいう主体性は、自我としての主体を指し、その脆弱性とは、自我の成立における脆弱性であり、自我の未分化さによって内面性の成立に弱さがあるということと考えられる。

したがって、自我が未分化な次元をベースにおいているユングの理論は、現代における主体性と内面性の乏しさとして見える問題へのアプローチに力を発揮すると考えられる。ユングの理論は、自我を超えた、生きものレベルにおける生きる主体としての自己が、何を捉えているのかを、自我が捉えそこなっているために心的危機に陥るという見方をしているとも言える。そのため、第一義的には、自己が何をキャッチしているのか、自己には何がどう見えているのかに目を向けようとする。そのことが、一つには、自我の自己とのコミュニケーション能力を支えることにもなるわけである。

このように、ユングは、彼の時代における現代人について、自我を確立したおかげで、リニアな進歩が得られたが、逆説的に、自我の視野を超えるノンリニアなものとのコミュニケーション力が脆弱になってしまい、そのことによる心的危機が生じていると考えていたわけである。この視点は、まさしく現代にこそ必要であり、意義深い視点ではないだろうか。

第3章 ユングの分析心理学における心的危機論 A

ここまで検討したように、ユングの心の概念は、自我が未分化である次元をベースにおいている点に大きな特徴があり、そのため、中年期やうつの問題に限らず、統合失調症や自閉症等における自我が未分化で未成立である問題をも捉えうる強みをもっていると考えられる。なお、本稿では、自閉症とその周辺の問題（アスペルガー症や、軽度発達障害と呼ばれるものも含む）については、特に断りがない限りは、特定の概念（自閉症スペクトラム）や診断基準における名称（DSM-5における自閉スペクトラム症など）ではなく、それらを包括するものとして「自閉症関連問題」と表記する。

こうした心の概念とそれに基づく心理療法理論を打ち立てた基盤となったのは、彼が今でいう統合失調症やその類縁の問題を抱えたクライアントとの心理臨床実践を重ねてきたことや、何よりも彼自身が、自伝において「私の一生は、無意識の自己実現の物語である」(Jung, Jaffé; 1961/1963)と述べる通り、幼年期から心的現象に対する深い問いを抱え、少年期と中年期に、それぞれ神経症的な危機と統合失調症的な危機を体験し、自らそれらの心的体験にアプローチを重ね、心の本質について探究し続けてきたことにあると言える。

しかし、ユングにおける心的危機論は、中年期危機とうつについてとりあげ、その機序について説明する形をとっている。この論自体は、そのエッセンスにおいては、他の発達期や他の精神疾患や発達障害、その他の心的問題について考えうる素地を提供しているものの、それらの機序についての説明は十分とは言いかねるように思われる。

そのため、後の章において、ユングの心的危機論をユング自身の心の概念に立ち返ることで再検討をおこなう。さらには、ユングの心的危機論を、精神病理学的観点からも照らすべく、木村敏の自己論および存在構造論からも検討を加える。この章では、その前提となる、ユングのもともとの心的危機論を「心的危機論 A」とし、松下(2010)の端的な概説を踏まえつつ、事例も提示しながら、ユングの論を敷衍して述べる。

1 ユングの「心的危機論 A」と個性化

1.1. 自我の一面性と補償

自我の形成と確立は、自我の側から見た場合には、意識されていなかったものが意識化され、未知が知となる面を含み、何かを「自分」として選び取るという自己観の形成を含み、自分にとって何が望ましく何が望ましくないかという価値観や世界観の形成を含む。このような自我を確立すること自体が重要であることは、ユングも認めている。しかし、自我が確立した自らのあり方に固執してしまうような一面的態度が進むと、自己である無意識は、自我のあり方とは裏返しの対照的なイメージを、自我へと送り込むとしている。このことによって、心の全体性を回復しようとするわけである。こうした自己調節機能を「補償 compensation」と呼んでいる(Jung, 1921/1971)。

ここで、ユングの論を敷衍してみよう。自我の一面的態度が進むということは、自我の視点に囚われ、心全体である自己が体験しているものを自我が見逃してしまったり、避けたり無視したりする「心の分裂状態」が生じることになる。つまり、自己と自我の連携が絶たれ、心の全体性が失われる、心の危機である。自己は、自我が何を無視し見えていないかをイメージとして自我に伝えようとする。それは、自我の見えていないものや避けているものであるために、自我のあり方の「裏返し」のイメージを生み出すことになる。このことについてさらに検討してみよう。

自我の一面的な姿勢を補償する元型的イメージの代表格が「影 shadow」や「アニマ anima」である。例えば、自分のものとして認めてこなかった面が影のイメージとして迫ってくる。社会的地位を確立した男性的で論理的な人が、感情に弱かったり、女性的な包容力に惹かれたりする。こうした、自我として確立してきた、物事を切り分ける男性性・論理性に対する、物事を結びつけ包み込む女性性・感情性といった補償的イメージが「アニマ」イメージと呼ばれる。

こうしたイメージは「他者」の姿をとった自己からのイメージである。自我にとって自己は、自らを動かすおおもとでありつつ、「自らを超えていく」力であるため「他者性」としてイメージされる。逆説的ではあるが、そのことによって初めて、自己という力を「対象化」し、個でありつつ個を超える力と向き合い、関係を結び、体験していくことが可能になる。そこに何が見いだされ、どんな関係を結び、どんなプロセスを生きていくかは、個人によって異なる。「私」を動かす普遍的な力を「私」としての一回性の individual な自己として生きていく。

このように、「個性化」においては、どのような自我を形成するかが重要なのではなく、常に、無意識的自己と自我が呼応的に関係を紡ぎ、その関係を生きていくことこそが重要なのである。

1.2. 中年期危機と「影」

ユング(Jung, 1928-1943/1953)は、それまで人生の円熟期と位置づけられてきた「中年期」の心的危機について早くから指摘しているが、それはまさしく、こうした自己と自我の関係および個性化過程における危機を端的に示すものとして説明されている。

ユング(1928-1943/1953)は人生を太陽の動きにたとえ、中年期危機について次の指摘をおこなっている。午前中をかけて、太陽の輝きも熱も徐々に増し、「正午」に絶頂を迎えて以降は、また徐々に輝きも熱も褪せていく。この正午以降が中年期以降にあたる。人生の正午から逆転現象が起き、人生の午後が始まる。つまり、自我が確立され、分別もあり、自分の生き方を築いてきた中年期に、「それまでの対応態度が突然役に立たなくなってしまう瞬間が訪れる」という危機的状況を呈すると指摘している。いわば、中年期まで生きてきた中で、自我を確立し、自らの生き方と人生を獲得してきたけれども、それが円熟したとたんに、それまで生きてきて自ら手にしてきたものの価値の喪失体験が生じる。その心的体験が「うつ」というわけである。

こうした午前から午後への移行は、「以前に価値ありと考えられていたものの値踏みの仕直し」を必然的に要求する。つまり、それまでの自我にとって価値があったものと無価値であったものとの対立と葛藤が生じることになる。ユングは、人生の午後である中年期以降の意味と意図は、人生の午前である青年期までのそれとは異なるとし、中年期の課題として「若い頃の諸々の理想の反対物の価値を悟ることがぜひとも必要になってくる」と述べている。

しかし、半生をかけて獲得し大切にしてきたものの価値を根底から見直すのは生易しいことではない。自我にとって大切なものが失われようとする時、それまでの生き方にしがみ付くか、逆にそれまでの生き方を捨てて逆方向に活路を求めることが多いとユングは指摘し、「肝腎なのは、反対物への転化ではない。その反対物を承認しながら、以前の諸価値を保持すること」であり、「若い人間が外部に見出してきたものを、人生の午後にある人間は、自己の内部に見出さねばならぬのである」と述べている。言い換えれば、それまでの半生において、その価値を見出せず、価値がないとして、よく見てこなかったもの、すなわち、自らの「影」と向き合い内面化していくという課題である。

1.3. 自我と自己の関係性の変容 —古い価値体系から新しい価値体系への模索

影との戦いを内面化し、価値がないと見てきたものの価値を見出す課題に、どのように向き合いうるのであろうか。この点に関し、ユングは、無意識を抑圧するのではなく、無意識をはっきりと、彼とは区別さるべきあるものとして自己の前に据えることが重要であると述べている。抑圧するのでは、常に無意識に背後から動かされることになってしまう。そうではなく、影を視野に入れ、自我と区別し、対象化していくことが必要なのである。

そもそも、影を自我の視野に入れることが難しいのは、自我の価値観では価値あるものと無価値なものとの「相反する対立項」として見えているためと考えられる。この点に関し、ユングは、フロイトとアドラー Adler, A. の理論は相容れないと見られがちだが、両者とも心の現象について一定の説明をしよう点で価値があり、むしろ、心の現象は両理論がそれぞれ光を当てている二面を併せ持つものと理解すべきだとしている(Jung, 1928-1943/1953)。つまり、「相反する」のは対象の性質でなく対象への光の当て

方の問題なのである。

中年期に必要となってくるのは、以前のものの見方を捨てて新しいものの見方を取り入れるというような「どちらか」ではなく、「どちらも」を可能にするような、両方の視点を相対化し止揚する視座を獲得することと言える。さらに言えば、中年期に、従来の価値観が役に立たなくなる事態に陥り、無価値の価値を見出す必要に迫られること自体が、「相反する」と見えていた対立項の「止揚可能性」を示唆する自然な動きとも考えられる。

従来の価値観の見直しとは、「相反する」と見えていた価値と無価値の線引きを見直すということであり、それは必然的に、価値と無価値に仕分けていたそれぞれの中身を、あらためて目の前に据えてよく吟味し、あらたな共通点と相違点を仕分ける線引きを見出すことになる。それによって、古い価値体系から新しい価値体系への再編を成し得るのだと考えられる。言い換えれば、それは、意識的自我と無意識的自己との関係の持ち方の再編でもある。

1.4. 事例

実際の心理臨床の現場でも、ユングのいうような、自分の価値観を確立し頑張ってきた人が中年期にうつに陥るといふ事例に出会う。

一つの典型的な例として、A男の事例をとりあげる。彼は、現場で働くことに生きがいを持っていたが、中年期に管理職についてしばらく経った頃から、朝どうしても起き上がることができなくなり、精神科にてうつ病と診断され、投薬治療を受けていた。回復期に入り、社会復帰への準備も視野に入れる形での心理療法をと、主治医から打診され、精神科の臨床心理士であった筆者が心理療法を担当するようになった事例である。

まず、A男が、初回で、自身の問題についてどのように捉えていたかについて語った概要とそれについてのやりとりを、ヴィネットとして提示しよう。個人情報保護の観点から、今回の目的に必要な、一般化した水準に情報を絞り込み、個人が特定されない形で簡潔に記述する。

【初回の冒頭で語られた発病経緯】

自分は仕事に生き甲斐を感じていた。仕事はできる方で、そういう自負も内心あった。周りにも頼られていたと思う。自分は現場が好きで、本当は現場にいたかったが、管理職につくことになった。現場が最前線という思いがあり、そこから退いたような思いもあったが、若い部下を育てることも役目と思い直した。しかし、部下や周りの人間が「頼りなく」、「自分しかやれる人間がない」ので、仕事を抱え込む形になって。そこに、突発的に仕事が降ってくるのが続いて。残業続きで、机の上も下も整理しきれない状態になったが、整理している暇があれば、次の仕事にとりかからないと間に合わないため、どんどん乱雑になった。睡眠不足や胸がむかむかするような体調不良が続き、無理をおして仕事を続けたところ、朝どうしても起き上がることができなくなり、休職することになった。

【A男とセラピストのやりとり】

上記の発病経緯がA男から語られたあと、A男とセラピストの間で以下のやりとりが生じた。以下、

「A 男の言葉」〈セラピストの言葉〉として記載する。

〈そこまで追いつめられるまで頑張られたんですね。部下や周囲が「頼りない」のですか〉

「部下は頼りない。すぐ訊きに来る。教えても、仕事に時間がかかるし、言ったことの一部しかできてない。意図が伝わっていない。やり直しさせるより、自分でやった方が早いから、自分が引き取って」

〈えーっ。部下の仕事もやってあげてたら大変ですよね…。「一部しかできてない・意図が伝わってない」のは、具体的にはどんな感じなんですか?〉

「自分だったら(こう)するのに、(これくらい)のことしかしない」

〈なるほど…それをご覧になってどう思われるんですか〉

「話にならない。どうしてそうなるのか、理解できない。自分の中ではありえないんで…」 〈こういう人、前にもいたなあという感じですか?それとも、初めて出会ったタイプですか?〉

「あー…ないですねー、若い頃なら絶対一緒にいないタイプですねー」(ちょっと嬉しそう) 〈そうなんですか。A 男さんにとっては、その部下の仕事はどのあたりがよろしくないんですか〉

「(部下の仕事ぶりについて説明し) そんなことではダメ。もっと(こう)しないと、(こう)になってしまうのに…」

〈なるほど…A 男さんの仕事はとても細やかによく考え抜かれている。たしかにそうですよね。今おっしゃったことは部下には?〉

「そこまでは、言ってないですねー。」

〈実際には、何と? どんなふうに伝えられたんですか〉

「(実際に部下に伝えた台詞を再現する。ものすごく優しい口調で、まったく批判的内容がない)」

〈「もっと、こうして…」とその部下に伝えるのは難しい感じ…なんですかね〉

「あー、難しいですねえ」(「そうなんですよ」と言わんばかりの、少し嬉しそうな顔をする)

〈A 男さんの考えを伝えないのは、何か理由があるのですか?〉

「自分は上から言われずとも考えてやってた。自分で考えない人には、言っても通じないと思う」

〈なるほど…たしかに。…もし、あえて、そこを伝えるとしたら、どのあたりが難しいですか?〉

「まあ…、言っても伝わらないと思うんです」(セラピストの目を見据えて、きっぱりした口調で言う) 〈…というと?〉

「自分の言ってることを『大事なこと』と思ってもらえなさそう、というか…」

〈えー…そうなんですか〉

「まず、部下の仕事ぶりからして、そこまで考えられないだろうな、というのが。それに……『何でそこまでしないといけないの』って思われそう。ちょっと軽く見られてるフシがあるんですよ…。…あと、自分の性格的に、相手に要求を伝えること自体が、何か、相手にケチをつけてるみたいで嫌なんです」

A 男は、部下への不満や怒りを押し殺してうつになった。自分がつかんできた仕事上の価値観から見ると、部下の働きぶりが全く理解できず、価値も見出せない。「そんなことではダメ、もっとこうでない

と」という思いが湧くが、そこに「部下はそこまで考えられない」という低評価だけでなく、「A 男の言うことを軽く見られている」というネガティブな評価懸念が隠れていた。そのようなネガティブなイメージに囚われて、それを避けようとして、自分が引き受けたりミスをフォローしたりと負担を抱え込んでしまう。上司として、部下の仕事に対し、ネガティブな要素が入るような言葉かけを避けてしまう。——こういう例にはしばしば出会う。

ユングは、その人が生きる中で培ってきた優越した心的機能と、自分のものにしてこなかった劣等機能があるとし、後者は自分とは異質なイメージとして、実際の人間関係の中で誰かに投影されることを通じて初めて体験されることが多いとしている。それがこれまで自分のものとして認めてこなかった影イメージであったり、それまで社会との間で確立してきた自分の顔であるペルソナを補償するアニマイメージであったりする。ユングは、アニマは感情として現れることが多いと述べている。

A 男はペルソナに同化している人であり、A 男の心に「苦手な人」がペルソナに反するものを担って登場し、そこには必ず感情というアニマを連れているのである。つまり、A 男がつきあいにくくて困っているのは、自分の中の隠れた感情なのである。相手へのネガティブな感情に振り回され、中立的に関われない。相手を否定するような感情があるため、それが具現化されるのを恐れている。しかし、興味深いのは、A 男は「感情」に苦しんでいるわけだが、その「感情」に苦しむことによって、のっぴきならない形で、これまで避けてきたものと「正面から」取り組まざるを得なくなっているのである。

ユングは、無意識を抑圧するのではなく、無意識を前に据えて、自我と区別していくことの必要性を常に説いている。河合俊雄(1998)は、アニマからも自我を区別する必要があると、感情として現れるアニマを、「自分の気分」として捉えて自分と混同してしまうのではなく、感情をイメージとして捉えることによって対象化していくことが必要であると述べている。つまり、感情というアニマを、いわば人格と自律性をもった客観的存在として認めていくことで、感情と対話し、関係をもっていくことができるとしている。

言い方を換えれば、それまで苦手な自分の中には見出してこなかったものを「他人」に投影するという機制を利用して、自分とは切り離された「他」のものとしてならコミットしやすく、よく吟味することで今まで見えなかった面も見えてくる、とも言える。A 男が部下の話をする際、どこか生き生きとするのは、苦しくとも新鮮な、今まさに体験していることなのである。どういう点が嫌で許せないかなど、部下の様子をよく見直し、A 男のひっかかりを事細かに見ていくうちに、A 男の自我にとっての影的なイメージである、苦手なものの中身がイメージとして徐々に明確になり、苦手さの輪郭が見えてくる。その分、苦手さが心に広がってしまわずに少し余裕ができて抱えやすくなる。他者イメージそのものにも人格が宿るようになる。

ここで、A 男の例に戻り、その後の展開について述べよう。

後の回では、苦手な部下と関わりやすくなった様子が語られるようになる。自我にとっての影であった、ネガティブ・イメージの輪郭がつかめ、少しずつ関われるようになることで、苦手な部下の側の様子も視野に入るようになり、以前より関わりやすくなる。そのことに関連して、A 男自身の若手時代

が想起される。

「若い頃、先輩に頼りたい気持ちがあったのに、先輩の厳しいダメ出しに凹み、腹が立ち悲しかったことがあった。そうなりたくないと思ってきた、一人で考えてやってきた・・・と思っていた。でも、その先輩のダメ出しの時のことが、まざまざと思い出された。自分の当時の未熟さについてのダメ出しは、今から思えば、適切だった。そのおかげで、仕事を自分で考えておこなえるようになったと思う。

それに、未熟な自分の頑張りを認めてくれてもいたことに気づいた。どこを頑張っているのか、どこが自分独自の強みなのか、そういうことをホントに理解してくれていたのは、その先輩だった。当時は分からなかった。そういうことが次々思い出されて、懐かしくて泣けてきた。

自分のような価値観で仕事をする仲間がいないと感じ、孤軍奮闘していた。気持ちが頑なになり、思い上がっていた。視点が違うだけで、部下も部下なりに考えているとわかった。『やればできるじゃないか』と思うような。ちょっと嬉しかった。見直した。これだったら話ができると感じたら、肩の力が少し抜けた。気が楽になった。部下のこと、見えてなくて悪かった。これからはもっと考えを聞いてやろうと思う」

「自分で考える」生き方で進んできて、「自力で考えない」部下が理解できず苦手と感じてきた。それまでは、部下は、A 男の影を担うイメージであった。その影のイメージである、部下の様子をよく見て、A 男にとってどこがひっかかるのかを精査していくうちに、A 男自身の若手時代にもあった、どこか部下に似た「先輩に頼りたい気持ち」を発掘する。先輩のダメ出しにあい、先輩に頼るあり方を封印したことが想起され、当時は、自立と依存が対立項として捉えられ、依存的なあり方は無価値で克服すべきものというメッセージを、その先輩体験から受け取っていたことも見えてくる。けれども、その体験が追体験される中で、依存を許さないように見えた先輩イメージの中に、A 男の主体性や独自性を見出しつつ、成長を促すイメージを再発見する。その瞬間、A 男の中の、依存欲求や未熟さにアプローチしうる先輩イメージが見えてきて、A 男の部下への見え方も変化し、部下の主体性や独自性を見出す視点が具体的に生まれてきている。

こうした自己変容は、形としては過去と現在の統合と言えるかもしれないが、その一方で生じているのは、影と向き合うことによる自我と自己の再編である。つまり、いったん区別され、対立項的に捉えられていた、自我と影の線引きのあり方の見直しであり、自他の区別の再編である。ユングは自己の変容や実現について「個性化」という語を用いている。これ以上分割できない単位としての自己へと向かうという意味である。これがゴールというようなものがあるのではないし、そのような外にあるゴールに向かうのでは自己ではなくなってしまう。上の例で見えてきたように、「これが自分」と信じてきたものの中にひそかに含まれている「他性」や、「自分を脅かす他者」と見えていたものの中に含まれる「自分」を自分の心眼で選り分けていくことで、自と他を生きたものとして区別し捉えていくことを絶えず進めていく。そのような自我と自己の対話、自我と無意識との対話を続けていくという、「自己との動的な関係」を得ていくことが「個性化」であり、「心の全体性の回復」なのだと考えられる。

第4章 ユングの心的危機論Aの再検討

1 自我の確立と「反ネガティブ信仰」

ユングの心的危機論は、上に述べたように、「自我がいったん確立された」場合の心的危機、すなわち、確立された自我が、自我の見方に囚われて、自己すなわち心全体が見ているものを見ていないという、心の分裂状態、すなわち、自我と自己の分裂状態が生じているのだと捉えている。このことは、もう一歩踏み込むならば、自我が、心全体が捉えていることとの接点を失っていると同時に、環界との接点を失ってしまう事態を示していると考えられる。

ユングが、心的危機について論じる際に、中年期危機を選んだのは何故であろうか。

その理由は、一つには、社会的には価値があると見なされるような生き方を確立してきた人であっても心的危機が生じることを示すのに、もっとも適していたからではないだろうか。そして、心的危機は単に「ネガティブな」だけのものではなく、心的成長と表裏一体であるということを示すのにも、最適であったからではないだろうか。いわば、「反ネガティブ信仰」の呪縛を解くために、多かれ少なかれ、人々が広く体験しうる「あるある体験」を選んだ、という側面もあるのではなかろうか。

自我の確立は、影を生み、「反ネガティブ信仰」を伴う。自我は、自我にとって「ネガティブ」に見える影を生み出し、嫌う。物事や対象が「ネガティブ」に見えると、「ネガティブ」面にばかり囚われてしまう。さらには、「ネガティブ」なことを体験すると、その短期的・長期的な「ネガティブ」な影響が生じるのではないかと恐れることも少なくない。そして、その「ネガティブ」な面を避けたり、取り除いたりすることで解決しようとする。それは、それ自体が、自我の成り立ちであり、自我確立の方略であったからだ。自我が、自我にとって「ネガティブ」に見えるものを切り捨てることで成り立ってきたからだ。

しかし、「ネガティブ」というのは、物事や対象そのものの性質ではなく、それらを見る側の価値観によって与えられる性質である。自我がそれまで「切り捨てた」面は、自我の側に選びとるだけの価値を見出しておらず、よく見えていない面であるために、自我の視野に入った時には「ネガティブ」に見える。それが、自我とは「相容れない」、「共存しがたい」ものとして捉えられていると、自我を揺るがすような、いわば自我の生き死ににかかわるような「ネガティブ」さとして体験されることもありうる。そのために、自我にとって「ネガティブ」に見えるものを回避することで、自我を守ろうとする。

けれども、その方略では済まなくなり、「ネガティブ」なものに向き合わざるを得なくなり、否応なく、自我の視野に「ネガティブ・イメージ」が立ち上がってくる。それは、本来的な自己である無意識の側では、自我が「ネガティブ」なものとして切り捨ててきたようなものについて、色々な局面でキャッチしてきたために、自己の一部であるはずの自我にも、そろそろキャッチしうるような準備状況が整いつつあるために生じてくる事態と考えられる。だからこそ、避けていた面が、自我に迫ってきて、これまでのように振り払ったり、回避したりできなくなるのではないだろうか。

したがって、自我がこれまで通り、あくまで、自我の「反ネガティブ信仰」に囚われて、避けようとするばかりでは、問題はなかなか解決できないけれども、避けてきた「ネガティブ・イメージ」と対面し関わりをもつことで、「ネガティブ・イメージ」との関わりの中に身を浸すことで、「見てこなかった、

未知のものであるから、暗く見える」もの、「自分にとって価値の光が見えなかったために、暗く見える」ものの性質が、体験を伴って見えてくる可能性があるのだと考えられる。

2 反ネガティブ信仰とリニア信仰の呪縛からの解放

心に関する問題に対し、一般的によく見受けられる「反ネガティブ信仰」は「リニア信仰」も伴いがちである。「何か過去にネガティブな経験が生じたら、将来にネガティブに影響してくる。」「過去に獲得すべきものが獲得できていないネガの状態のままだと、そのことが原因となって、行く行くはネガティブな状況が生じる。」——心の問題は、こうしたネガティブ面の連鎖的因果といったような、直線的(リニア)な関係だけで捉えられるものではなく、心の成長も、直線的(リニア)に階段をどんどん上のような形で生じるものではない、というパースペクティブを、ユングの心的危機論 A は提供している。

こうした視点は、ユングの理論に一貫して見られる。

例えば、彼のタイプ論における主機能と劣等機能の概念は、モノを捉える機能として何を主機能として獲得し培っていくかが、その人の体験様式を規定するというものである。機能の種類自体に、何の優劣もない。どの機能をいつ頃に獲得しなければならない、というような価値づけもない。また、自分のモノの見方の機能として培ってこなかった劣等機能があること自体も悪いことではない。それは生きる戦略を勝ち得た必然的な結果であるからである。しかし、生きる道のりの中で、自分のものとして獲得してこなかったモノの見方や感受性にも開かれる必要が生じる局面が出てくる。それは、〇〇の時期には××の機能を備えねばならなかったのに、それが不足していたから後で不安定な状態を迎えた、ということではなく、その人なりのステップの踏み方だということにすぎない。あるモノの見方を選んで生きてきたが、それだけでは生きていけない時期がきて、それまで自らの内に持ってこなかったモノの見方も必要になったら、それを視野に入れていけばよい、そういう必要が出てきたらその課題に向き合えばよい、という考え方である。ユングが個性化について説明する際にも、具体例としてとりあげた事例の展開や、個性化のイメージの一つとしてとりあげた錬金術師における錬金術テキストにみられる錬金術プロセスのイメージについても、「プロセスにおいてあらわれる状態の順序が重要なのではない」ことを強調しており、自我と無意識/自己の関係のダイナミズムをこそ重要視している(Jung, 1946; 1955-56)。

話を戻そう。ユングの心的危機論 A は、心的危機と心的成長のダイナミズムを示すことには成功しており、その点では、中年期危機やうつの問題に限らず、さまざまな心的問題についてアプローチしていく際の大きな視座を与えてくれる。しかし、先に指摘した通り、心的危機論として直接的に説明されているのは、「自我がいったん確立された」場合の危機である。したがって、この論の限界を吟味するとともに、この論をどう敷衍し、どのような観点を付け加えれば、自我にある種の脆弱性があったり、自我が未確立な段階であったりする場合に適用可能な論になるかを検討する必要があると考えられる。

3 ユングの心の概念と心的危機論 A の再検討

そこで、心的危機論 A を、ユングの心の概念の理論と擦り合わせる形で、あらためて再検討したい。先に少し触れた点をあらためて取り上げつつ、心がモノを体験し、イメージとしてつかんでいくはたら

きの時点というミクロの視点から、もう少し詳しく捉えたい。

自己から自我が生まれてくる段階については、ユングにおいてそれほど詳しい説明はない。ただし、ユングは、自我も心的複合体(コンプレックス)の一つであると述べている。これらを敷衍してみると、もともとは無意識である自己が、生き抜くために、環界との関わりの中で常に刺激をキャッチしており、さまざまにキャッチした無意識的次元における心的内容(無意識的次元のイメージ)が少しずつ結びついて心的複合体(コンプレックス)を形成するにつれて、そのうちの一部が意識されるものとなり、自我が生まれてくるのだと考えられる。

そして、自己の本体である無意識がキャッチしたものを、自我が受け取り、「つかむ」ことによって、無意識的体験の意識化と自我による体験が生じていく。ただし、自己すなわち心全体がキャッチしたものを自我がつかむ、ということは、「ある面を選びとる」ということを含みこんでいる。「ある面を選びとる」ということは、「他の面は選び取らずに切り捨てる」ということでもある。

このように、自我が自己との間でイメージをつかむということを重ねるうちに、徐々に、イメージ間の連合もさまざまに生まれ、心的複合体としての自我が成長していく。自分(自我)のイメージ群や、他者のイメージ群、世界のイメージ群などの複合体がさまざまに生まれるとともに、相互につながりを持ち、一般に言う、自己像や他者像、世界観などが形成されてくる。そのプロセスにおいて、自我がイメージとして選びとる面やイメージ間の連合の性質、イメージ群の位置づけ方や関係づけ方など、モノの捉え方に傾向が生まれてきて、自我の「価値観」も形成されてくる。こうして、自我のモノの捉え方の方向性が生まれてきて、いわゆる、自我の確立と呼ばれる状態が形成されてくると考えられる。

ユングは、自我の確立自体は、生きる上で重要だが、自我の姿勢の一面性が強まりすぎると、自我と自己の分裂状態が生じるとしている。この点についても敷衍してみよう。

自我に一定のまとまりや方向性が生まれ、それが強まり、確立されていくことは、一方では、自我によって選ばれない、すなわち、意識されないイメージ群にも、ある種の方向性ができてくるということの意味すると考えられる。それは、自我の側からすれば、自我の捉えている内容や方向性とは「近しくない」「共存が難しい」「異なる」「相反する」ものとして見えるような、「受け入れにくい」イメージ群と考えられ、だからこそ、自我には意識されない。

このことを、自己すなわち本体である無意識の側から見てみよう。無意識の方ではキャッチし捉えているのに、自我が目もくれない、しかもある種の心的内容が受け入れを拒否されつづける、という状態が生じる。これが続くと、無意識の側では、キャッチし捉えたものの把握の度合いも大きくなっていく。心全体としてはずいぶんよく見ているので、自我に意識してもらってもよいはずなのに、自我に拒否され意識されない。自己と自我の捉えている内容も分裂し、対話機能も分断されたままになってしまう。それでは、自己と自我が対話的にモノを捉えていくはたらきがストップし、自己としての更新が滞ってしまう。

心全体を見ている自己からすれば、自我の把握内容も、自我が拒否する把握内容も、両方よく見ているものであり、心全体としては受け入れ可能・統合可能なものである。そこで、自己は、無意識側が見ているものを自我に届けようと、自我が受け取らずにきたイメージをまとめて送る。そのことで、自我と自己の対話性を復活させ、心の全体性を回復しようとする。これが「補償」と呼ばれるはたらきと考

えられる。しかし、それは、自我にとっては、「未知の」イメージであり、「相反する」「受容・統合しにくい」イメージ、受け入れると自我のこれまでのまとまりが揺らぎそうな「ネガティブ」なイメージとして体験される。補償によって「自己から自我に、正反対のイメージが送られ、そのことで心の全体性を回復しようとする」とされているのは、こうしたプロセスを指していると考えられる。

4 心的危機論 A の展開

こうして細かく見ていくと、心的危機論 A は、心的危機の代表として、自我の確立後に生じる中年期のうつの問題をとりあげてはいるが、心的危機の本質は、中年期という時期にあるのではなく、自我の自己との関係の持ち方の構えにあると言える。つまり、自己が捉えた無意識的イメージを自我が受け取る際に、自我の側が、これまでの自我がつかんできた意識しうるイメージとのつながりや共存可能性を見出せず、「相容れないもの」「相反するもの」として拒否してしまう、という自我の構えである。それは、自我が、自我の捉えているイメージから抜け出せず、そのイメージでしかとらえられない、といった自我の見え方・イメージの固さ、視点の固さと言ってもよいかもしれない。

こうしたことは、自我が確立し、自我のモノの受け取り方や方向づけ方の構えが「固まった」中年期だけに生じるわけではなく、程度の差はあれ、他の発達期にも生じると考えられる。自我が自己からイメージを受け取り、モノを捉えるといういとなみを続けている限り、さまざまな局面で、ある視点に効力を覚え、その視点に軸足をおくことで自我のイメージ世界の安定をはかろうとすることは生じうるし、逆にそれに囚われることで苦しむこともありうる。

例えば、幼児期や児童期に、「親」のイメージを自我イメージに取り込んで、親の価値観をあたかも自分の価値観のように体験し、そのモノの見方に軸足を置いていた方が安心できるといった状態がある。そこから、徐々に、無意識の方では、それ以外の視点を含むイメージもさまざまに生じ、思春期・青年期には、より個性的な視点の潜在的な芽が育ってきて、それを自我がどう受けとめていくかによって、自我のモノの見え方の成長的变化が生じうると考えられる。しかし、その際、それまで依存してきた親の価値観のイメージに自我が縛られてしまうと、無意識の側の潜在的な個性的視点が力をつけてくればくほど、自我と自己の心の分裂状態に陥る、といったことが考えられる。

つまり、無意識的な自己の側ではより個性的な新しい視点がつかめつつあるが、意識的な自我の側がそれまでの親や社会の価値観に依存した視点に囚われている、といった、意識を超えたところでの潜在的葛藤が生じうる。その葛藤状態は、自我においては、自己の側から頭をもたげつつある新しい視点の萌芽を、まだ自分のものとしてリアルにつかむことができないが、これまでの自我の視点での見え方・捉え方の方もまた、自らの生きるリアリティを失いつつある、といった過渡状態でもある。だからこそ、萌芽な可能性が、既存の旧いあり方で覆われてしまったり、共同体的な捉え方に抑え込まれてしまったりすることを拒否するような心的動きが先鋭化し、「不登校」「ひきこもり」や「反抗的態度」「回避的態度」、「非行」などが生じうると考えられる。

このように見れば、心的危機論は、中年期のうつの問題を捉えるだけでなく、より幅広い、自我と自己の関係における接触障害とも言える問題を捉えうるものと言える。このことは、同時に、個性化も中年期以降のいとなみというわけではなく、生涯を通じてのいとなみとして見る視座も準備するものと言

えよう。

5 ユングの心の概念の理論と木村敏の存在構造論 ー心的危機論Bに向けて

先に述べた通り、ユングの「心の概念」は、自我が未分化な次元をベースにしているため、この概念を踏まえて心的危機論を再検討することで、統合失調症や自閉症およびその周辺の心的問題に代表されるような、自我未分化や未確立の問題にアプローチしうる論として捉え直すことが可能と考えられる。

このことに関し、心的次元における自我の成立の問題、あるいは自我を支える自己構造の成立の問題をとらえる、精神病理学の立場からの論に、木村敏の存在構造論がある。この論の根底にある自己論は、ユングの心の理論との共通点も多いため、ユングの心的危機論を、この精神病理学の立場からの存在構造論に照らすことで、より精緻に捉え直すことができるのではないかと考えられる。

木村(1979)は、自己の根源を「ノエシス」すなわち「主客未分の根源的自発性」「個別化以前の根源的で無限定な自発性」と捉えており、一瞬一瞬の現在における直接的な生命活動の一環としての行為的・はたらきの・産出的な面を指す。言い換えれば、ノエシスは、自覚の生じる以前に自ずとはたらいている根源的な力であり、物事を捉えたり、対応したり、自らを方向づけたりするおおもとの力である。これはユングの言う、無意識や自己の概念にも含まれている要素である。

ノエシスは、ものごとや対象をつかむことで像(イメージ)を生み出す。この像をノエマと呼ぶ。ノエシスはつかんだものに応じたノエマを生むことで、心的内容を表象として体験する。ノエシスが、つかんだ諸点の含まれたノエマを生むことは、それ以外のノエマの可能性ではなく、それと区別した形で、像を選び取るということである。この「差異」をつかみとることが、「他」ではない「自ら」の体験内容としてつかみとることであり、「自」と「他」の区別をつかんでいくはたらきを支えていると考えられている。つまり、この「差異化」が、「他」ではない「自」が成立する根拠と見なしているのである。

木村の自己論や存在構造論におけるノエシスすなわち根源的自発性と同様、ユングの心の概念においても、自己すなわち無意識は不断のいとなみを続けていると捉えられており、さらに、両者とも、その根源的な力がイメージを生み出しているとして捉えている。木村の言う、根源的自発性であるノエシスがノエマを生むことで、「自」を「他」と「差異化」してつかみとるいとなみは、ユングにおける自己である無意識が意識との間でイメージを生み出し、自我をつかみとるいとなみに相当すると考えられる。

木村は、この自己論と対をなす形で、存在構造論をなす一連の論文群を発表している(木村, 1974, 1976a, 1976b, 1976c, 1979, 1980, 1981a, 1981b, 1982a, 1982b, 1984, 1985, 1986, 1988, 1998)。彼は、従来の症候論的な疾病分類や、健常から異常、神経症から精神病に至る病態水準といった視点からでは、病像を動かしている基本構造を捉えることができないとし、これらの区別を超えて、健常から精神病圏までのスペクトラムの中で、成因論的共通性をもつ基本的存在構造を捉えようとする。

具体的には、統合失調症(精神分裂病)、うつ病、てんかんがそれぞれ内包する基本問題に関する膨大な文献の綿密な検討を通して、次の3つの「基本的存在構造」を抽出している。

①アンテ・フェストゥム *ante festum* 構造：自己が現実を離れた未知の次元での自己実現を求める、統合失調症親和的存在様式

②ポスト・フェストゥム *post festum* 構造：自己が完了態的な未済の回復不能性を恐れる、単極うつ病親和的存在様式

③イントラ・フェストゥム *intra festum* 構造：自己が一瞬一瞬の現在における主客未分の根源的自発性(ノエシス)と即自的な、急性転機(危機)親和的な存在様式

そして、これらの3つの存在構造は、心的次元において、一瞬一瞬に刻々といなまれている、自と他の差異化と自我の成立における、3つの契機としても抽出しうる。少々かみ砕いて言うならば、次の3契機と言えよう。

- ③ノエシスとしての契機（根源的な生きる力としての契機）、
- ②ノエマ化の契機（物事や対象の体験をイメージとしてつかむ契機）、
- ①ノエマ化し得ない契機／ノエマでは捉えきれない本質を追求しようとする契機(体験をイメージとしてつかみきれない契機／より純粹に本質をイメージとしてつかもうとする契機)

さらに、これを、一般的に体験される「自分」と照らして説明すれば、以下のように言えよう。

- ③自分を越えたところから自分を突き動かす力である「自分の本源力」の次元
- ②他者や社会との間でこれまで表現されつかんできた「既知の自分」の次元
- ①まだ表現されずつかめていない「未知の自分」の次元

このうち、どの次元に「自分」の軸足をおいているかや、①～③のバランスのあり方が、性格や生きと方の違いを生むと考えられている。さらに、「自分」を支えている軸足が揺らぐことが「自分」のゆらぎであり、そのゆらぎの性質は、軸足の性質によって異なると考えられる(松下, 2012, 2019)。

これに照らすと、心的危機論 A で捉えているのは、②ポスト・フェストゥムの契機とそれに軸足をおく構造にあたる。すなわち、一瞬一瞬の心的体験をイメージとしてつかむ「ノエマ化」によって、その都度の自我が成立する、といういとなみと、それによって世間との間で表現され獲得されてきた「既知の自分」が、個としての自らのあり方を支えている。ただし、既知の、ノエマ化されたものに軸足を置いているために、それまで獲得してきた基本路線から外れることこそが心的危機につながる。このことをユングの理論で捉え直すと、既知の意識化されたイメージに自我がはまりこんでいるために、無意識の側で「今」つかみつつあるイメージと自我との関係の接触障害が生じ、今の心全体が捉えているイメージやその生き生きしたはたらきに自我がコミュニケーションすることができない状態が、心的危機状態と言えよう。

第 2 部 心理臨床における現代的問題へのユング理論からのアプローチ

第5章 自他の区別にまつわる問題：統合失調症と自閉症関連問題

1 主体性・内面性の脆弱性と自我の未成立の問題：自他の区別(自他未分性)をめぐって

このように、心的危機論 A は、自我の成立に支えられた内界-外界の成立が前提となっているが、ユングの心の理論や木村敏の精神病理学的観点からの再検討を通して、ユングの言う心的危機の核は、自我と自己の関係であり、自己である無意識が「今」つかみつつイメージと自我との接触障害、ひいては、その都度の現在における、心のおおもとの生き生きしたはたらきに自我がコミュニケーションできないことであることが見えてきた。

一方、これまで述べてきたように、ユングの理論を敷衍することで、心的危機論 A では捉えられていない、自我の成立や内界-外界の成立が前提となっていない、自他未分ないしは自他未成立の問題における心的危機についても捉えることができると考えられる。これを心的危機論 B として提示することを目標としたい。

自他未分ないし自他未成立の問題の代表格としてあげられるのは、統合失調症や自閉症とその周辺の問題であろう。これらについて指摘されることの多い「主体性や内面性の脆弱性」や「自我の未成立」等の問題は、「自」と「他」の差異化とそれによるその都度の「自我」の成立に不安定性がある場合に相当すると考えられる。以下に、それぞれの問題について検討したい。

1.1. 統合失調症における自我の未成立の問題

統合失調症は、器質的基盤上の変化という要因もあるうえ、それらだけでも説明のつかない内因性精神病である一方、自閉症は器質性の問題も指摘される発達障害であり、それぞれ別の疾患単位として捉えられ、医学的な立場からの薬物療法を始めとした治療的アプローチも発展してきた。しかし、一方で、それらの精神疾患や障害を有するクライアントが、自分としての人生を生きていくという問題については、個々の「生きる主体」の次元を捉える臨床心理学的視点が不可欠である。そして、そのような次元に目を向ける重要性に関し、山中(1976a)は、統合失調症と自閉症関連問題は、「自」と「他」の区別の問題とそれによる「自己(私)の未成立」(「自我の未成立」)の問題を有するという点で共通分母を見出すことができると指摘している。

さらに、この点について真正面からアプローチしているのが、上述した木村敏の存在構造論である。この論の視座と視点は、臨床心理学の分野においてこそ必要なものと考えられるため、これを臨床心理学的に捉え直しつつ、「自我の未成立」の問題について論じていきたい。

存在構造論においては、「自我の未成立」の問題に関わる基本的存在構造は、①アンテ・フェストゥム構造と③イントラ・フェストゥム構造にあたる。先に見てきたように、①は統合失調症親和的な存在構造であり、「自」と「他」の差異化がまだなされていない契機に「自」性の軸足がおかれているあり方であり、自他差異化による「自我」が未成立な次元にあるものである。松下(2019)は、アンテ・フェストゥムの先鋭化は、まだ捉えられていないような未知の次元で、より純粋に差異化しようとする動きが強まることであり、とらえようとすればするほど、逆説的に差異化とノエマ化が保留されてしまうことを

指摘している。

これをユングの心の概念と照らして敷衍してみると、無意識の側でさまざまな対象やさまざまな面や点をキャッチし、無意識の側ではさまざまなイメージが生まれつつあったとしても、それらを自我がうけとめることでイメージが自覚される、といったことが生じにくかったり、自我がイメージを自覚したとしても独特の捉え難さがあったりする、といったあり方と考えることができる。

これは、無意識の側のキャッチしているものを、自我が受けとめて、それに応じたイメージとして「切り出す」力の脆弱性の問題、としてひとまずは理解されよう。特に、その都度の心的次元における自と他の切り分けの脆弱性、すなわち、自我親和的なものと自我違和的なものを分ける力の弱さがあるため、他とは心的に切り分けられた自我のまとまり感をつかみにくく、自分としての存在感覚や基盤感が希薄になったり、感じていることが他者の気持ちなのか自分の気持ちなのかの区別が曖昧になったり、自分の思考が他者性を帯びて体験されて、それに振り回される、といったことが生じうると考えられる。

ただし、ここでいう脆弱性は、例えば、自と他はもともと別々のものとしてあって、それを区別する力が弱いといったことでは、ない。むしろ、本来的には根源的自発性においては自と他は区別がなく、その都度に自ら差異化することによって、自と他が区別され捉えられる。その際に、自と他をより純粹に捉えようとするような志向性が高いからこそ、簡単に切り分けられないといったことである。一般的には、人は、その都度、自と他を区別して捉えているが、その区別には必ずしも一貫性はなく、場合によっては、都合よく、内なる暗部を他者のものとして体験するといったことも往々にして生じていることは、防衛機制の概念からも知られている。しかし、その場合も、あくまで他者のものとして体験されるか、もしくは、それを通して自分を省みて、自らのものとして体験しなおすか、といったように、その都度、他者のもの・自分のものという切り分けがなされたり修正されたりする。一般的には、その都度の区別が、いわば「割り切れる」ことで、自我のまとまり感をもつに至るが、統合失調症においては、そのような「割り切り」に安住することができない。

これに関連して、自覚の有無を問わず、「他ならぬ自己であるか否か」という根源的な問いに生きる、統合失調症におけるアンテ・フェストゥム構造の先鋭化は、ポスト・フェストゥム的な、「これまで自としてつかんできたもの」を自とすることに甘んじたり、「これまでの自他を切り分ける線」を自他を区別する基準とすることに安住したりすることを許さない。そのような形では「自己感」をつかむことができないからである。そして、知らず知らず、常に、未だ知らぬ自己に敏感であるために、これまでの自とは異なる、新たな自の側面が分化しようとする時、それが、これまでの自とは異なるものとして、他性を帯びて体験されると考えられる。この動き自体は、広く一般にも、例えば、あることに関する自意識が芽生えようとするプロセスにおいて、自分が自分に向けはじめた視線が、他者が自分に向ける視線として体験され、他者の目を気にしたり恐れたりする心の動きとして見られる。単に他者の目があるというだけで終わらず、その他者の目が自分を捉えようと迫ってくるものとして体験されるのは、それが本質的に、自分が未知の自分を捉えようとする心の動きそのものの萌芽であり、新しい自分の萌芽であるからであろう。

これが先鋭化し、前景に立つと、新しい自分の萌芽が、未知性に彩られた形で強く意識され、自らをつかまえて別次元に連れていこうとするような未知の他者として強く体験される。自分の考えを未知の

他者から操作されていると体験される考想操作や、抜き取られていると体験される考想奪取など、「させられ体験」や「つつ抜け体験」に彩られた自我意識障害、未知の組織から見張られ、逐一報告されているといった「未知の他者による支配」性に彩られた妄想などに、特徴的に表れる。

これらは、一方では、自他の分化における「脆弱性」ではあるが、自他を「簡単には分けない」という点では「強さ」であり「強み」でもある(松下, 2005)。自己の実感はなかなか得られないかもしれないけれども、自己の実感というものに対して、本質的問いとして掲げ続けられていると見てよいだろう。そこが自覚的に本人に意識されてはいなくとも。そして、心理臨床においても、本人の自己感や他者感をめぐる、あるいは自他感をめぐる、揺れ動きこそが、実は本人の大きな意味での主体の動きであることを大切に見ていくことが、重要であると考えている。

1.2. 自閉症関連問題における自我の未成立の問題

一方、自閉症関連問題についてはどうだろうか。

カナー Kanner, L.(1943)やアスペルガー Asperger, H.(1944)の描き出した自閉症の概念とその特徴を、ウィング(1995, 1997)は自閉症スペクトラムとして捉え、「社会性」「コミュニケーションとしての言語の使用」「こだわり(想像性)」という三つ組の障害としてまとめている。山中(1976a)は、これらの「表面的」な特徴は、「自他の未分化」による「自己(「私」)の未成立」という事態に由来するものとして論じている。こうした、自閉症スペクトラムの本質に、心的次元における自他未分性を見てとる視点は、カナーやアスペルガーにも見られるほか、河合(2010)、野間(2012)、田中(2017)、内海(2017)等にも見られる。

山中(1976a)は、今日、「コミュニケーション」の障害として捉えられる面に関して、①対話的なコミュニケーションが成り立ちにくかったり、「人称代名詞の使用」において主客が逆転したり、聴いたままの言葉をおうむ返しのように繰り返したりするのは、他と区別される「私」が成立していないためであり、自-他や主-客の未成立の表れであると考えている。

そして、今日、「想像性」の障害として捉えられている「こだわり」の問題に関しては、②ものや人の存在にまつわる対象恒常性などの「自明性を喪失」しているために、「かつ、そのよりどころとなる自己が未成立なために、安定した基盤を欠き、不断に外界のうち状態が変わらないものにしがみつき」、カナーの指摘する「同一態維持への強迫的欲求」にあたるあり方を呈すると考えている。それは「言わば、自己のよりどころは外に在るものだけ、という『自己』が全く外界に散らばっている状態と言える」としている。

この主張を筆者なりに咀嚼してみたい。

自が他と切り分けられて「私」としての座を獲得しておらず、自他が分化されないままであるために、「私」の成立によって生じる「内界/外界」という構造が生まれていない。したがって、「見えたまま」の「外界」体験が、そのまま「内界」体験でもある、といった自-他や主-客や内界-外界が未分化な体験様式になっている。これが「自己の外在化」と呼びうる事態である、という主張と理解しよう。したがって、「外界」の「同一態」の維持に「こだわる」のは、外在化された自己の「まとまり」や「一貫性」を何とか守ろうとする努力なのだと言える。

さらに、山中(1976a)は、今日、社会性の障害として捉えられている面に関して、③『自閉』とは、

まさに症児のかかえている根源的な事態、本来自己が成立すべきところに他者が出現してしまう事態、いわば《自己の未成立》の事態を辛うじて守るかりそめの自己の示す防衛反応が、他者に受け取られたときに感じられるもの」であり、こうした根源的事態が、対人距離の《無限大》の「遠さ」、もしくは場合によっては《零》となる「密着」という形であらわれるとしている。

このことを筆者なりに咀嚼すると、本質的には自己(私)の未成立の事態を抱えている中で、かりそめの自己(私)の「まとまり」を、対人距離をどこまでも「遠く」とることで守ろうとする、あるいは、距離を無くすことで守ろうとする、ということと考えられる。このように、山中(1976a)は、自閉症児者の対人距離の取り方に、「近さ」 closeness への不安を見ている。それは、自他未分性に由来する自己の未成立の事態において、木村敏が「他ならぬ自己でありうるか否か」という「個別化の危機」として記述したアンテ・フェストゥムの不安として述べられている。

一方、内海(2017)は、自閉症は発達上のつまずきによる自他未分の問題があり、他者の志向性が視野に入らないのに対し、統合失調症は自他の分節化の問題が生じ、他者の志向性に敏感になるという違いがあるとしている。田中(2017)は、自閉症の自他未分の問題を、「心的誕生」の「未生性」として捉え、精神病・境界例・神経症といった、人格構造を論に基づく病態水準で捉えられるものが「心理学的誕生」へのプロセスに生じるものであるとは異なるとしている。つまり、自閉症においては、生物学的には誕生しているものの、環界に対するどこまでも受身的な体験様式に留まり、環界を見る・捉えるといった対象化して関わるような、自他を分化して捉えていく、能動的な(狭義の)主体的な心的動きが乏しく、環界に対して心的存在として誕生する前段階にあると捉えている。

野間(2012)も同様の視点から両者の違いに触れ、自閉症(広汎性発達障害)者は、「自分の思考の枠組みで生活できている限りでは安定しているため、それがいつ崩れるかといったアンテ・フェストゥム的な不安はない」としている。また、時間体制としては、ひたすら現在に生きるという意味では広義のイントラ・フェストゥムに該当するが、生き生きとした生命性は希薄で空疎である点では、狭義のイントラ・フェストゥム(祭りの最中)よりはむしろ「コントラ・フェストゥム」(祭りの彼岸)であると述べている。

このように、山中や木村は、自閉症に、自他未分性に由来するアンテ・フェストゥムの不安を見てとり、内海や田中、野間は、自他未分だからこそアンテ・フェストゥムの不安はないとする。前者は、いちおう両者の疾患単位は区別しながらも、共通性・連続性という視野で捉える立場、後者は、両者の疾患単位的な中核像を区別する立場と言える。これらは、一見、正反対に見える意見であるが、連続性と中核のどちらを重視するかの違いであり、臨床的には、どちらの視野・視点も必要と考えられる。

それは、1 つには、近年、自閉症と統合失調症が、異なる点がありつつも、オーバーラップも認められることが、さまざまな立場の研究からも指摘されているからである。また、自閉症児・者が思春期・青年期にさしかかる頃に、周囲との違いに気づいて悩んだり、不安を感じたり、解決を図ろうとしたりすることも広く知られ、多くの論者が指摘するところでもあるからである。自閉症児・者においても、そのような、自他の区別の萌芽が生まれてくる局面、アンテ・フェストゥム的な動きが表立って生じ始める局面があるわけである。そうであれば、自閉症関連問題における自他未分の問題においても、広義におけるイントラ・フェストゥムとアンテ・フェストゥムにまたがるスペクトラムで捉えておく方が、治療論的にも、成長や治癒の動きを視野に入れやすいのではないだろうか。

そもそも、木村の論においても、イントラ・フェストゥムは、根源的にアンテ・フェストゥムを内包していると説かれている。根源的自発性は環界に向かうものであり、環界をつかもうとすることで、自らを捉えると考えられ、そこにアンテ・フェストゥム的な「前方に自らを見る」萌芽を見ている。ここで、彼の論を筆者なりに敷衍して考えてみる。根源的自発性が環界をつかむ瞬間、つかんだものは環界（の一局面）であるが、同時に、そのように、つかんだ体験内容はそのまま自らの体験内容でもある。またそのつかみ方の中に、自分自身のあり方も含まれる。例えば、空を見て「夕日が黄金色に輝いている」のを見た瞬間、その美しさや壮大さに見入って立ちつくす時。その瞬間、眼前に広がる夕日の光景は、自らの中にも広がって体験されている。その瞬間において、見ている夕日の光景は、そのまま内界の光景である。このように、根源的自発性が捉えた瞬間の、環界の体験が、即、内界の体験であり、両者が融合すらしているような、外と内の線引きが生じていない体験様式がありうる。その瞬間は、環界をそのようにつかむことで、自分はそのようにものをつかんだということを直接的に知る。そのようにつかんでいる自分が存在することを直接的に体験する。それは、体験を対象化して内省することを通じて知るのとは異なる、より直接的な体験である。それは言葉に置き換えにくい体験である。さきほどの「夕日体験」をあとで振り返って、他者に伝えようとしても、言葉が追いつかず、「ものすごく美しかった」「とにかくすごかった」「めっちゃ感動した」としか言えないということも往々にしてあるだろう。その時に体験していたものが、ある時、「敢えていうならば、すべてのものに同じ命が輝いているんだ、といったような感覚を、言葉でなく、直接貫かれたような感じがして…すごかった」といった解釈が生まれてくるようなことがある。そして、その時の体験が、繰り返し捉え直され、そのたびに、新たな面が拾い上げられて言葉にされることもある。このような、つかみ切れないものをつかんでいくことは、環界をよりよく捉えていくことと、自らの体験をよりよく捉えていくことを含み、さらにはそのように新たにつかんでいく自分をもつかんでいく。未知だった自分を新たにつかむことになる。

1.3. 事例

根源的自発性次元の、イントラ・フェストゥム的な、直接性の体験様式が、自閉症の体験様式であるという点では、筆者も、野間(2012)と同意見である。しかし、上に見てきたように、イントラ・フェストゥム次元の体験様式は、アンテ・フェストゥム的な動きを内包し、それが展開しうる種を宿している。

筆者の臨床経験においても、自閉症児・者が、それまでの体験埋没型のあり方から目覚めはじめることを数多く体験している。「集団の中に自分が生きる場所を見出したい」思いと「集団の中で蔑まれるのではないか」という不安の間で葛藤するようになった者。ふと思いついて、集団のマネをして溶け込もうとしてみたが性に合わず、やはり自分をアピールしてわかってもらおうと試行錯誤を重ねる者。さまざまな形で自立を試みる者。それぞれの形で、アンテ・フェストゥム的な動きが生じる。ただ、その動きは、空回りしやすい。彼らは、不安定で刹那的で落ち着かない世界に生きているため、自他の裂け目が生じ始めることによる不穏さに対して、せっかちな対処をおこないがちである。腰を据えて情報を集めて精査して戦略を練るといった余裕がないし、そういうことをしない傾向がある。しかし、彼らは、まったく何も捉えていないわけでも、捉える力がまったくないわけでもない。ここに、セラピストが関与する余白があり、意義がある。この点について、アスペルガー症と診断されたクライアントB男の事

例をあげて考えてみたい。なお、事例の記述においては、個人情報保護の観点から、この検討点に必要な事項のみに限定して記載する。

【初回面接】

大学中退後、実家にひきこもっていた B 男は、「そろそろ社会に出て働くよう親に急かされたが、親が言うような仕事は自分には向かない。働かないと、とは思うが、無理に仕事しても続かないと思うので、親の意向に困っている」と述べる。こう書くと、すらすらと語っているようだが、実際には、セラピストと目を合ったり、セラピストが声を発したりする間、目を激しくしばたかさせ続け、言葉がなかなか出ない時間が続いた。次いで、辛うじて言葉のような言葉でないような声を出して、一見話しているふりをしているかのような状態が続いた。その後、長い長い時間をかけて、ごく断片的な同じ言葉を、か細い声で絞り出すことを繰り返していた。そのようにして、ところどころ言葉が浮かび上がるのを汲んでつなぎあわせたものが上記の訴えである。セラピストである筆者は、〈B 男さん自身が「今は無理に仕事をしてもらえないと思う、考える時間が必要」と言うのだから、そうなのだろうと思う〉と伝えると、ぱっと顔を輝かせて、「そうですか！よかった、わかってもらえて」と安堵した様子を見せ、「誰にも負けない自分を見つけない、自分を生かせる仕事を見つけないんです」と訴える。

【以降の面接】

しかし、その後のセッションでは、この言葉が繰り返されるものの、自分が何をしたいのか、どんな仕事に自分が合っているのかについては、具体的なものは全く出てこない。「そんなものはないのかもしれない」と急に不安になったかと思うと、「でも…このまま家の中で生き続けるのもいいとも思うんですよね…」と急速に諦めモードでか細く呟く。このように、抽象的な希望を熱く訴えては、悲観し、弱々しく諦念することを、セッション中ずっと何度も繰り返す。

セラピストは、〈話をうかがって、私を感じたことを伝えてもいいですか？ 私を感じたことなので、B 男さんにとって違ったら教えてほしいのだけど〉と前置きすると、B 男はうなずく。〈B 男さんは、今はまだ外に働きに出るタイミングではないと感じている、ということではないか。せっかくなら、どんな仕事があるか色々調べて、じっくり選んでからの方がよいのでは〉と提案すると、「自分に合う仕事なんて、ないんじゃないかと思うんです」と言う。〈ないかどうかは見て見ないとわからない。何か見つけたからといって、すぐに仕事を始めないといけないわけでもない。仕事をいつからはじめるかは、しばらく置いておきましょう。焦らずに、まずはどんな仕事があるのか、データ集めをして、見てみるところからはじめてもいいのでは？〉と言うと、「ああー、そうですね、その方がいいですね」と少し目を輝かせて納得する。

続くセッションでは、見つけた仕事の話からはじまって、それと関連する形で、自発的に、自分の過去の対人関係の話、つらかった出来事の話、家族関係の話などを、ぼつりぼつりと自発的に振り返って語られるようになる。最初のうちは、明瞭に思い出せなかった出来事も、回を重ねるうちに、だんだんと想起されるようになる。語りぶりも落ち着いてきて、本人の芯が感じられるようになってくる。そのことは本人の方が強く感じていたようで、あるセッションで、「ここで、振り返って話すようになって、

いろんなことが思い出せるようになって、自分がこういうこと思っていたんだということも感じるようになった。自分というものが、まとまって、落ち着いた」と、両手でまるくまとまったものを、地面に向かって垂直に下に勢いよく下ろし、がつん！と杭を打ち込むがごとく、打ち据えるジェスチュアをしながら訴える。「こうなってみて、これまで、ふわふわ、ぼんやりして、落ち着いていなかった、ということに気が付いた。こうなりたかった。ずっと、落ち着きたかったんです。落ち着くことができ、自分で考えられる感じになってきた。よかった」と思いのこもった様子で話す。

彼が思い出した過去のエピソードの中には、驚くほど短絡な思い付きを拙速に行動に移した例も、いくつも見られた。内心の驚愕を抑えつつ、詳細を聴いていると、本人にとっても「その時は、いいアイデアだと思ったんですよ…。絶対成功するって思ってたんですよ。だけど、全然うまくいかなかった。今から思うと、何でそんなことを…と。当然ですよ。そんなんじゃないですよ…」と語り、今ならどうするかを考えることができるようになる。また、過去の人間関係の平板さに思い至り、当時のクラスメイトの一人一人の様子や言動を思い出して、「今さらながら、この人はこんなこと思ってたんだな、こういう人だったんだな、って思う。子どもだけど、すごくしっかり、自分があったんだな。一人一人、そういう自分があるって、しっかりしてたんだな、って思う」という話をするようになる。彼はその後、さまざまな取り組みをおこない、社会にも少しずつ出ていき、人にも関わるようになっていく。その中で、主に、対人関係における大小の事件も生じつつ、紆余曲折を経ながらも、徐々に、対人関係において信頼のおける相手を見つけて相談する力もつけていった。自分の課題にも向き合い、悩みながらも、対人関係や自らの内界に生じていることを捉え直し、自らの捉え方のクセ等、その都度気づきを得て、解決の糸口も見出せるようになっていく。最終的には、自分に合っているというだけでなく、関係者の利益や人間関係も考え抜いた形で、仕事を選び取り、社会の中で自分を生かしていくあり方を見出し自立していった。

B 男は、当初、イントラ・フェストゥム的な自他未分のあり方から、自他の差異への自覚が芽生えつつある中、未来への意欲も持ちつつも、未来へと踏み出す準備が整わないために焦りと恐れが強くと、もすれば自他未分の融合的世界へと逃げ込もうとする様子であった。

この局面での、セラピストの役どころは、まずは、本人の対処のあり方の中で、自と他を比較的安全に切り分けうる方法を、本人との間で見つけ出すことである。B 男は、当初の段階では、自立をめぐって、自らを生かすことができ、かつ他者とは異なる者として存在できることを求めているが、まだその具体的イメージは見えていない。しかし、その際、親のアイデアにとりあえず乗ってしまったたり、親の意向に動かされてしまったたりするのは、自分らしく在ることができないように感じている。つまり、親と自分の違いが、内容としてはまだ見えてきていないが、少なくとも親が思う形ではない、という形で親と自分とを区切ろうとしている。けれども、親の意向を退けることもしにくく感じており、周りの意向にともすれば動かされやすい面がある。そこで、セラピストは、B 男の「親の言う通りにするのは自分のみこまれてしまう」という判断に、他律的な存在となってしまう不安を受け取るとともに、親と自分の区別の萌芽も受け取り、B 男の判断を支持した。つまり、B 男が B 男自身について捉えて判断する、という自律性への動きを支持し、B 男が親の意向から少し距離をとって、B 男自身にエネルギー

一を向けやすくなることを目指した。

すると安心したものの、B 男は今度は、自立のイメージが乏しく、自他未分の方向に向かおうとする。このことは、「結局、自立したいと言っても、どうしたいかわからないから、家を出たくないのだ」と言えばそれまでだが、セラピストがそのような理解に留まるのであれば、「早く家を出て自立して働かない」という親の目線と何ら変わらないことになる。そして、B 男自身、「早く家を出て自立して働かない」という焦りがあるからこそ、親の同様の意向が気になり、そちらの方向に無闇にエネルギーを取られ、自分にエネルギーを向けて、落ち着いて捉えるといったことができないでいるのだ。そこで、セラピストは、はっきりと、〈まだ外に出て働く時期ではない〉ことを再三、言葉をかえながら伝え、外と内を切り分ける線を引きながら、さらには、自分にあった仕事を探すこと自体も B 男の焦りから切り離すべく、仕事と B 男自身とを短絡に結び付けることも避けるべく、〈仕事を始める時期はいったん置いて〉、〈どんな仕事があるのか〉自体にフォーカスをあてて、B 男自身の目を通して、仕事に関するデータ収集と精査をおこなうことに絞り込むように枠づけた。そのことで、B 男が、いわば自軸に軸足を置いてモノを見ることがしやすくなるように、そして、セラピーの時空間が、他律性から距離をとって自律性をつかんでいきやすくなるように、という考えからの枠づけをおこなったわけである。このような、自他の区別への動きを支える形での関わりを一貫しておこなうことは、その後の展開で見られたように、B 男が自他を区別して捉えて精査し、さらには自他に関与していくことを支えることにつながったと考えられる。

このように、自閉症関連問題の場合も、広義のイントラ・フェストゥムを基本構造としつつ、アンテ・フェストゥム的な動きに展開し、自他の区別を支えることで、空回りでなく、自他を捉えていくことが可能になると考えられる。

上述のように、自閉症の不安の性質が、統合失調症のそれとは質的に異なるという風に、疾患単位的に大づかみに捉えることも重要であるが、心理臨床の次元において問題になってくるのは、疾患単位そのものの次元ではなく、結局のところ、問題は「自」の成立のあり方であり、その振れ幅・変動や変化を連続体(スペクトラム)としてとらえる中で、その個別性を見ていくことこそが重要である。

1.4. 自閉症関連問題の内面性の問題

上に述べたように、自閉症関連問題の場合、自他未分ゆえに、内面性が成立しにくい、自他の分化の兆しを支えることで、内面性が生まれてくるのがわかる。

しかし、自他未分の状態においては、その体験は「空疎」だったり「空っぽ」だったりするのだろうか。この点について、あらためて問うておきたい。

野間(2012)は、自閉症の基本的なあり方は、現在に生きるという意味では広義のイントラ・フェストゥムに該当するが、生命性は希薄で空疎である点では、狭義のイントラ・フェストゥム(祭りの最中)よりは「コントラ・フェストゥム」(祭りの彼岸)であると述べていることは既に述べた。

木村のイントラ・フェストゥム概念は、主体や自己を、意識される自我を超えたものであり、生命性や生命力の次元を含めたものとして捉えているが、野間のコントラ・フェストゥムは、木村の論をベー

スにしながらも、意図的・戦略的に、「意識」される自我の層で捉え直し、記述している点に注意が必要である。つまり「意識」される領域においては、具体的なエピソードや明細化に欠け、内省も難しい、という点では「空疎」と捉えられるかもしれない。しかし、野間は、「生命性」次元で捉え関わることの重要性をも合わせて説いている点にも注意が必要である。つまり、自閉症児者における主体や自己について、両者とも、視野に入れている範囲自体は共通しているのである。

また、先に述べたように、イントラ・フェストゥムの自他未分における体験様式は、根源的自発性が捉えた瞬間の、環界の体験が、即、内界の体験であり、両者が融合すらしているような、外と内の線引きが生じていない体験様式と考えられる。つまり、山中(1976a)の指摘する、自己の外在化は、見たままの外界が即内界であるような、内界と外界の区別のない体験であると考えられる。この点について、田中(2017)は、自己が外在化し、内界が空洞化していると捉えているが、彼の言う内界は、自他の区別の上に成立する自我が、内界と外界を区別して捉えた際の内界として捉える必要がある。そのような区別がまだ明瞭に生じていない、自他未分の状態では、体験そのものとしては、外界即内界のような体験と捉える方が適切と考えられる。

一方で、その説明として、先にとりあげた夕日体験の例は、野間の理解に照らすと、木村が想定している、生命性の直接体験に近い、体験様式として「密」なイントラ・フェストゥム体験ということになる。野間は、これに対して、生命性から距離をとる、体験様式として「空疎」なイントラ・フェストゥムとして、コントラ・フェストゥムを考えている。しかし、自他未分においては、一瞬一瞬の外界体験に埋没した体験様式であるため、その自他未分のままであれば、その直接体験の瞬間においては「密」体験であっても、体験が恒常的に保たれず、瞬間に過ぎ去り「疎」となるのではないだろうか。しかし、イントラ・フェストゥムは、根源的にアンテ・フェストゥムを内包していることも上に見てきた。その瞬間の直接体験が、外界即内界的に、非常に密に体験されることによって、その体験を捉えようとする根源的自発性の動きが生じることが、アンテ・フェストゥムなのではないだろうか。その時、「密」体験の何かが捉えられて、意識としてつかみとられ始めるのではないだろうか。そして、意識されなくとも直接体験されているからこそ、自我の力がついてくることで、事後的につかみとられるが生じてくるのではないだろうか。結局、「密」か「空疎」かは、自他の区別の上の自我を前提とした、外界と内界の線引された世界観から見た捉え方と言える。自他未分の根源的自発性の側から見た捉え方も必要になるのではないだろうか。

このように、自閉症関連問題における体験様式は、基本的にはイントラ・フェストゥム的な自他未分性を持ち、自と他をその都度切り分けて「自我のまとまり」の中に安住することが難しく、対象や世界の恒常性、ひいては自らの恒常性を自明のものとして獲得していない。そして、自他の区別に支えられた内界-外界という体験構造が成立しているとは言えず、外界が即内界であるが如き体験様式をもっていると考えられる。逆に、その都度の現在が、常に新しく、共同体の既存のフィルターを借りて捉えるようなことをしないために、場や関係が安定すれば、目の前の体験をよくみていくことが可能になると考えられる。また、自他の区別や内界外界の区別が脆弱であるために、容易に他者性に揺るがされてしまうために、目を合わせなかつたり、一見社会的な関わりを絶っているかのようなあり方をとったり、主

語が逆転したり、見えている世界の同一態を保つことにこだわることで、内界を安定させようとすることや、思春期・青年期に自他の違いへの意識が芽生えることで不安定になることは、自他未分のあり方からの、自他の分化の兆しと、それに対する反応を含んでいると考えられる。アンテ・フェストゥムの不安をどの範囲で見るとかについては、論者によって幅があり、統合失調症性の不安とほぼ同義に捉えている論者もあるように見受けられ、アンテ・フェストゥムの不安に含まれる質の違いを捉える観点そのものは重要であることには賛意を表す。ただし、木村自身は、病態水準を超えて、あらゆる人における自己成立の基盤にあるはたらきの1つとして、自己を前方・未知の次元に見出そうとし、まだ見ぬ自と他がどのように区別されて成立しうるかを問うアンテ・フェストゥムを取り出しているわけなので、ここではその範疇でとらえることにしたい。そのように捉えた場合、治療論的にも、自閉症の問題はイントラ・フェストゥムからアンテ・フェストゥムにまたがる視座で捉えておく必要があると考えられる。

1.5 根源的自発性とユングにおける無意識と自己

ここであらためて、自他未分の根源的自発性そのものの側に軸足をおいて捉えてみたい。そこで、木村の論に立ち返ってみる。

木村の論におけるイントラ・フェストゥムは、その都度の現在における、自他未分の根源的自発性としての主体の次元を捉えており、急性転帰に親和的なものとして捉えられている。彼の論における「主体」概念は、意識される層・自我の層における主体とは一線を画したものである。彼の「主体」概念のもとになったのは、生理学におけるヴァイツゼッカー Weizsäcker, V. v. (1968)の言う「主体」概念である。

例をあげてみよう。人が、地面に置くことのできない荷物をいくつか順次受け取りながら立っているとする。荷物の量が徐々に増え、一定の量に達した時に、それまでと同じ姿勢ではいられなくなるが、荷物を地面に置かずに立ったままでその量の荷物をもって立つことができる、新しい姿勢が生まれる。これは、有機体と環境との接点における出会いの原理が、それまでの姿勢が保てなくなったところで危機に瀕するが、そこで古い原理が捨てられ、新しい原理が生み出され獲得されるということである。この原理のことを、ヴァイツゼッカーは、主体と呼んでいる。彼は「主体は確実な所有物でなく、絶えず獲得され続けるもの」であり、「主体が危機に瀕した時にこそ、われわれははじめて真の主体に気づく」としている。つまり、主体は、有機体が環界との間で一瞬一瞬の現在において関係性をつかみつつ体現していく力であり、有機体が環界との間で有機体自身のあり方を変化させつつも、同じ有機体としての統一性を獲得し続ける力であると言える。

このヴァイツゼッカーの主体概念は、例えば、地面に生えている木が、周囲に木が新しく生えて育ち、日光の当たり方が変化していくにつれて、木がその都度、日光の当たる場所を探って枝の伸ばし方や木自身の姿勢すら変化させていく、といった、人間以外の有機体全般における主体をとらえたものと言える。木村敏は、このヴァイツゼッカーの主体概念を、精神の層で生じていることへの理解においてこそ重要と考え、彼の自己論や存在構造論のベースとなる、自己＝根源的自発性という概念に組み込んだわけである。その点は木村の卓見であるが、一方で、ヴァイツゼッカーの主体概念も、木村における自己概念も、人間の意識世界を超えた、いわば「生命性」の次元の、「生きものレベル」の主体や自己という面

も大いに含まれている概念と捉えるべきである。

こうして見てくると、根源的自発性は、ますます、ユングにおける無意識・自己が、意識されなくとも働いていて、さまざまなものを捉えており、その一部が意識となると考えられていることと、大きな共通点が見えてくる。そして、捉えられたものに関して、ユングがいうイメージ、象徴や物語についての理解も、こうした面からあらためて捉え直されるべきではないだろうか。

ユング(1964)は、イメージについて、「それが明白で直接的な意味以上の何ものかを包含しているときに象徴的であり」「完全に定義づけたり完全に把握したりできない概念をあらわす」としている。そして「象徴 symbol」とは「比較的未知のものと考えられる限り最善の、それ以上明瞭あるいは性格的には全く表すことのできない定義」(Jung, 1921/1971)とし、「記号 sign」とは区別して捉えている。彼は、イメージが象徴的であるかどうかは、そのイメージを見る態度によると述べ、イメージを特定の意味を表す代理物や印としてのみ捉えている場合は、「記号」的理解であるとしている。例えば、「カメは長寿の象徴である」などと言うことがあるが、この場合の象徴は、ユングにおいては記号ということになる。一方、そのイメージが、言葉にしつくせず、汲めども汲めども、まだ捉えきれないような意義深さを感じられる場合は、象徴的理解というわけである。

ここで、ユングにおける象徴概念の定義を、筆者なりにかみ砕いてみたい。「比較的未知のもの」とは、意識である自我にとってはまだよく見えていない、捉えられていないもののことである。そして、それに関して、無意識・自己がさまざまにキャッチしているものがあり、それが意識にのぼりつつあるプロセスで、さまざまな形でイメージされる。いわば、無意識である自己と自我との間で、心全体でキャッチしているもの、現時点ではこれ以上なく、心全体でありつたけを捉えたさまざまな観点の詰め合わせのようなイメージが、象徴というわけである。だからこそ、自我からすれば、相反するもの、矛盾するものが、ひとつのイメージの中に同居したりする。眠っている間に見る夢もイメージの1つであるが、夢の中では、人が空を飛んだり、水の中で火が燃えたり、急に場面が変わったりする。無意識である自己、心全体にとっては、それらはつながりをもっているからこそ、ひとつのイメージ、あるいは一連のイメージ群として自我に伝えられている、というわけである。

例えば、「池の中に、苔の生えた石が3つ重なっていて、『誰かが石で三重塔を作ったのが今までこうして残っているのか』と思って見ていたら、石から頭と手足のようなものが出て来て、小さなミドリガメが甲羅の上に小さな子どものカメを2匹のせて、ゆっくりゆっくり歩きだした」といったイメージが見られたとする。こうしたイメージは、夢で見られることもあるだろうし、箱庭やプレイセラピーで表現されることもあるだろう。心理療法での語りの中で、実際にあった出来事として体験されて語られることもあるだろう。いずれの場合も、心にそのとき生じたイメージであり、すべてのイメージは、無意識である自己がさまざまにキャッチし、自我が受け取った、諸観点からなる複合体(コンプレックス)である。それは、例えば、「小さなミドリガメの親子が、石のような状態からゆっくり歩きだす」といったストーリー的観点も、心の捉えた観点である。そこに登場する、池、石、ミドリガメ、といった構成要素もまた、心が捉えた観点の反映である。それだけでなく、苔の生えた石がどんな姿で、ミドリガメがどんな姿をしていて、どんな様子で、どんな動きをするのか、どんなところにいるのか、池の水はどんな風で、…といった風に、「心に見えているディテール」の中にこそ、心がキャッチしたさまざまな「観

点」が含み込まれているのである。

イメージを意味に置き換えるのでなく、イメージの見え方・体験のされ方自体に踏みとどまって、それ自体をよく捉えようとすることは、イメージに総合的なストーリーや意味が生まれる以前の段階に立ち返ることでもある。心が何かを捉える段階、知覚・感覚の段階にまで立ち返ることでもある。さらに言えば、そこには、生きものとして環界をどう捉え、生き延びるためにどう対処するのか、といった段階に立ち返る面も含まれる。例えば、どんな色や色調をそこに見てとるか、といった点ひとつとっても、知覚の段階で、視覚情報のどの範囲を、どのポイントを、どう受け取るのかという心身の感受性の個人差があり、捉え方の違いが発生する。また、知覚・感覚の段階での体験は、比較的すぐに内面的な自覚を伴った形で扱われる場合もあるが、必ずしもそのような自覚をそれほど伴わずに行動として表れる場合もある。そのような次元にまで視野をもって、心がキャッチしているものをイメージとして捉えようとするのである。

このように考えると、ユングにおけるイメージは、意味に置き換えていくことよりも、イメージそのものが心にどう見られているのか、どう体験されているのかに重点があると行ってよい。それは、心に生じているものを心自身がとらえたものや、心がキャッチして行動化されたものが、イメージの表れであり、イメージの中に、心に生じているものについて心自身が受け取ったものが含み込まれているからである。つまり、心が何をとらえているのかを、心自身の観点と受け取ったものを、内界・外界の両方に表現されるイメージの中からつぶさに拾い上げ、そこに心の目を向けることで、心がそれをキャッチした瞬間と体験そのものに立ち返ろうとするのである。それは、物事を捉える際に、半ば自明的に、字義的に捉えてしまったり、共同体における常識的な意味で受け取ったりしてしまいがちなところを、注意深く退け、心が捉えていることのリアルに迫ろうとすることでもある。

したがって、ユングの視点は、ストーリー性や意味性を読み込むことが難しいようなイメージ表現に対しても強みを持っていると言える。つまり、自他未分なあり方のために、自と他の区別を前提とした内界-外界が成立しにくく、イメージを内面的に対象化して扱うことに難しさがあるような問題を抱えているクライアントの言動にみられるイメージをとらえるのに有効である。さらに言えば、一見、ストーリー性や意味性を読みとりやすいようなイメージに対しても、そのイメージを捉えているミクロの心の視点や働きの次元にまで立ち返って捉えることで、心がそのイメージが生きて動いているところ、イメージ自身が展開していこうとしているところを捉えることができると考えられる。つまり、イメージの理解には、そもそも、ストーリー性や意味性以前の、はたらきレベルの理解の視点が欠かせないのである。

第 6 章 心的危機論 B の検討—ゼロベース・アプローチ

ここまで、主体性や内面性が成立する前提となる自他の区別の問題をもつクライアントに対して、その言動をはじめとしたイメージの理解において、ユングの理論的・実践的立場でのアプローチが有用であることを、ユングの理論と概念を問い直すことで示した。そこで、この節では、こうした問題を捉える心的危機論 B を具体的に提案したい。そして、そのような次元での理論および概念の問い直しを踏ま

えての、自他の区別の問題へのアプローチの視点は、自他の区別の問題が先鋭化している統合失調症や自閉症関連問題などの問題のみならず、主体性や内面性が基本的に成立している場合の問題に対しても、その成立基盤の次元に目を向けて捉え直すことに寄与すると考えられる。

自他の区別の問題は、心的体験を「イメージ」として切り出すことや、自と他を切り分ける自我の力の脆弱性の表れとしてひとまずは捉えうる。

一方で、自と他の区別の問題、すなわち「私が『他ならぬ私』であるか否か」の問題は、一般には自明のこととして追求されない問題である。「自我脆弱性」は、一般的には自と他の区別の自明性を捉える力の脆弱性かもしれないが、もう一方では、自と他を区別することの本質を、知らず知らずのうちに問い、追求しているような、潜在的な姿勢が含まれているのではないだろうか。そこには、必ずしも自覚はなくとも、「自力でつかむ」とはどういうことか、「自らの体験」とはなにか、という、心的リアリティと主体性のおおもとにあたる問いも潜在しているのではないだろうか。こうした根源的な問いに対して、少なくとも共同体の培ってきた価値観を鵜呑みにせず、一般的な形で解決を図らないあり方は、それはそれで、一つの潜在的な「力」として評価しうるものなのではないだろうか。そのこと自体が、心的危機論 B の形をとる心的問題の生きるテーマそのものなのではないだろうか。

物理的には、「私」は「他」とは異なる存在として生きていように見える。そして、「私」が存在するという意識や、「他」とは異なるという意識は、体験として直接与えられているように感じるのが一般的ではあろう。しかし、心的次元においての「私」、「自」や「他」の区別は実のところどう体験されているであろうか。「私とは何か」と正面切って問われたとしたら、満足に答えることができるだろうか。テレビで見た若者の様子に自分を重ねて見たり、特定のスポーツチームが勝てば自分が勝ったように喜んだり、友達が叱られていると自分も叱られているような気持ちになったり、かと思えば、自分のことを棚に上げて他者に非難めいた目を向けたりする、といったことは身に覚えはないだろうか。心的な次元においては、自と他の区別はフェジーであり、その線引きも必ずしも固定的なものではなく、揺れ動くものである。しかしながら、一般には、都合よく、「自分のまとまり感」を得られるように、その都度、自と他の線引きをおこなっている。精神分析における防衛機制とよばれる適応機制の理論も、木村敏の存在構造論も、それぞれの視点から、このメカニズムをとらえるものである。

統合失調症をもつ人は、こうした、心的次元における自と他が、最初から別々のものとして存在しているのではないという事実に身を曝し、心的体験の中で、どこまでが自でどこからが他なのかを、無自覚のうちに、より純粋につかもうとしているのではないだろうか。さらに言えば、それを、共同体の価値観や常識のような「借り物」ではない、「純粋に自身の視点」でもってつかもうとしている面があるのではないだろうか。だからこそ、常識を超えた、場合によっては、共同体の価値観と深いつながりをもつ言語の枠組みすら外し、その根底から問い直そうとすらしているという面があるのではないだろうか。

自閉症とその関連問題をもつ人の場合も、自他未分性については上に述べてきた通りだが、それに加えて、三つ組の障害として見えるあり方の中に、「自」と「他」の区別を、共同体の価値観を借りずに、自力で一から捉えようとする傾向を指摘しうると考えられる。自閉症をもつ当事者であるドナ・ウィリアムス Williams, D. (1998)やテンプル・グランディン Grandin, T. (2004) は、いずれも共通して、体験をつかむ際に、社会の「常識」に代表されるような「解釈」を取り入れ、個別性や細部を見ないような形

で捉える方法は実感が持てず、「知覚」を用いてあらゆる方向から対象そのものを「直接」確かめながら捉える方法の方が実感が持てる、と述べている。こうした、事象や対象の「個別性」と「未知性」に常に「新しく」出会うあり方は、そもそも、あらゆる事象や対象は新規のものであり、たとえ類例があったとしても、本来的には個別のものであるという事実にあらためて気づかせてくれる。こうした、物事や他者との出会いが、すべて未知次元にあり、社会における既知のシステムを借りることなく、より純粹にそのものを知ろうとするあり方や、それによって自分の存在感覚が支えられるあり方は、アンテ・フェストゥムのあり方の範疇としてカウントしうると考えられ、ここまで検討してきた心的体験の自他差異化と自我の成立にまつわるプロセスについては、自閉症においても共通する点があると考えられる。但し、統合失調症の場合との共通点はあるとはいえ、自閉症の場合は、自と他の切り分けに苦勞するにしても、いわゆる「外的」な「事物性」に「知覚」面で「しがみつける」ところがあるのかもしれない。加えて、一般の人々が共同体の価値観で見て取ったつもりになって、実は見ていないような「事実」を、「知覚」的にキャッチしている可能性もある。その場合、共同体の価値観に支えられている一般の人々は、それを自明なものとして疑わないために、自閉症をもつ者がそういう相手との間で、「他」性に振り回されてしまい、「自」のものとして体験をつかむことが阻害されがちになるといったことは生じやすいのかもしれない。

以上を踏まえると、自他の区別における、自他未分の問題、自我の未確立の問題のあらわれは、いわゆる「症状」としての側面と同時に、それ自体が問題への「アプローチ」としての側面があると考えられる。つまり、生きものレベルの、生命性レベルの、知覚水準からの、本人の心全体によるとらえ方や見え方は、その都度の現在における、本人の心のものごとへのアプローチそのものである。そのような心のはたらきを捉えることをベースにしたアプローチであり、イメージもしくは、イメージ以前の心のはたらきレベルからみるアプローチである。それを、従来の自我確立を前提としたアプローチに対して、自我確立以前の「ゼロベース」のアプローチと呼びたい。

こうした視点から、自他未分・自我未確立を中心とする、心的危機Bの表現型と潜在的対処のあり方を捉えてみよう。それは、大きく分けて、a. 自他未分による外界即内界、b. 無意識への無抵抗、c. 妄想／自己関連付け、d. 問題行動という4つのタイプがありうると考えられる。

a. 自他未分による外界即内界

ここまでの論で、木村敏の論を敷衍し、自閉症関連問題の基本的な体験様式として捉えてきたイントラ・フェストゥムのあり方、ただしそこにアンテ・フェストゥムのはたらきの前駆もふくみうるあり方に代表される。一瞬一瞬の根源的自発性のはたらきに即自的な、自他未分の体験様式であり、外界を捉えた体験が、即、内界の体験であるような、外界と内界に線引が生じていない、あるいは線引が脆弱なあり方と考えられる。

これをユングの論で捉えなおすと、無意識である自己は、その都度の現在において、環界にまつわる刺激をさまざまにキャッチしているが、それらに常に新しく出会い続けている状態と捉えることができる。ある程度まとまった、既存性を伴ったコンプレックスとしての自我が、一定の安定感をもって形成

されにくい。自我がまったく生じていないわけではないけれども、不安定であると考えられ、そのために、自我や対象にまつわる一定の恒常性が獲得されにくいと考えられる。

ただし、これは、無意識である自己のもともとの性質でもあると考えられる。その都度の、無意識的自己レベルでのさまざまな体験イメージがあり、それらが徐々につながることによって、いくつかのコンプレックスを形成していき、それらの一部が自我として意識されるようになると考えられる。つまり、自己から自我が、つながりつつも、分離して成立し、自己が捉えているものを自我が対象化して捉える構造を持ちうる可能性、自と他を区別し捉えていく可能性がある。

そのきっかけの1つになるのは、環界への即自的体験において、環界側から見ると「拒否」や「否定」や「接点喪失」として見えるような言動が生じることであり、これらは、自他未分のあり方から、自と他を分けて行こうとするはたらきの萌芽として見ることができる。そして、自と他を分け、他を拒否し否定するよう見える動きの中に、自軸を優先して選び取ろうとする動き、自を大切にしようとする動き、自としてまとまろうとする動きを見出すことができる。こうした、自他の分化の兆しと、自としてまとまろうとする兆しこそが、守られるべきである。自と他を分ける線が生じてくるということは、自としてまとまる輪郭線、すなわちその中身に応じた器となる線を生み出すこと、そのことによって中身をつかんでいくことにつながる。さらには、自と他を分ける線は、単に拒否するというだけでなく、自と他の違いを分ける線でありつつ、それらの接点としての線をつかむことにもつながる。こうした線は、一回引かれれば終りというものでなく、何度もさまざまな次元で見いだされていく線であろう。こうした点にまつわる言動を通して、そこに含まれているイメージの観点を、意味内容以前のはたらきの性質として捉えていくことが重要と考えられる。

また、こうした言動は、自他の区別の萌芽、体験の対象化の萌芽として、cの自己関連付けや場合によっては妄想的な意味付けのようなものが生じてきたり、dの問題行動として表れたりする可能性がある。

b. 無意識への無抵抗

ここまでの論で、木村敏の論を敷衍し、統合失調症の基本的な体験様式として捉えてきた、アンテ・フェストゥムのあり方の1つの形として考えられる。統合失調症はその発症に先立つ前駆状態において、何らかの大きな負荷がかかった中で潜在的な変化が生じている可能性があり、発症は実は、そこからの回復過程の1つの表れとして捉える立場がある。統合失調症にまつわる体験の「未曾有性」は、一般には「自明」のこととして問われない、「私が高ならぬ私であるか否か」という存在論的問題に関わっている。その未曾有性は、社会的価値観で捉えきれず、一般社会においてはシェアされていない性質である。また、一般社会で捉えられている自と他の区別の線引きに従うのでは、高ならぬ私として成立しない。その未知の次元における、未知の自と他をより純粋により分けようとしても捉えきれず、自や他の像を生み出すことが難しい状態と考えられる。

このことを、ユングの理論を敷衍して捉えると、未知の次元で生じていることを無意識である自己がさまざまにキャッチするものの、まだそれらが、あまりにも未曾有で、自我にとって圧倒的であるために、類例の像で近似してかりそめにも捉えるようなことができない状態と考えられる。それまでに自我

が成立している場合は、内海(2017)の指摘するように、自他の分節の問題が新たに生じた事態と捉えられるが、場合によっては、a.で見てきたような、自他未分のあり方に近いのか、あるいは、自我の性質が再編に開かれやすいあり方であるといった準備状態があり、あらためて究極の形で自他の区別を問い直すような動きが生じている可能性もあると考えられる。いずれにしても、この局面においては、自我が無意識的イメージに埋没し、無意識のイメージを自我なりに捉えるということがなされず、いわば、自我が無意識に無抵抗に曝されているかのようなあり方と考えられる。それくらいに、自我と自己の境界、自他の境界というものがいったん撤回されたような状態になっていると考えられる。

一方で、イメージとして「切り出す」ことをしないあり方そのものについても検討してみよう。自我が無意識のイメージを受け取る際に、何かを選び取って「イメージ」とする面がある。それが「切り出す」という面である。そのように「切って」しまうと、もとのイメージそのものではなくなってしまう。また、無意識は刻々と何かをキャッチし、キャッチされている心的内容自体も変動していると考えられる。このように、刻々と変化し、本来的につかみきることのできない性質をもつ、無意識のイメージを、より純粹に受けとめようとする、イメージが定まらず錯綜したり、いくつものイメージが併存したりして、まとまるというよりも拡がる一方になる。その意味では、自我は、イメージを「切り出し」て捉える力は脆弱であるため、自我がイメージを明確にまとまりをもった形で捉えることには困難があると考えられるが、無意識的イメージをなるべく「そのまま」にしようとする姿勢には、潜在的な受けとめ可能性を示唆するところがありはしないだろうか。

この点に関連して、山中(1976b)が統合失調症をもつ患者のバウムテスト表現には、幹の2本線が閉じられない「幹上開」が特徴的に多く、中には「漏斗状」に上に向かうほど幹が末広がりになるバリエーションが見られることを指摘している。松下(2005)は、この点を受けて、統合失調症をもつ精神科入院患者のバウムテスト表現の縦断的研究をおこない、幹上開のうち、幹が並行か先すぼまりのタイプと違い、幹が末広がりタイプでは後に幹や枝が閉じられる場合が見られるなど、プロセスが異なり、後者は一見正反対の方向に見えるほどの心的内容をまとめあげるだけの、潜在的な葛藤能力があり、その心的内容の振れ幅の大きさが、「漏斗状」のイメージとして表現されている可能性について指摘している。

これらを総合すると、a.の状態像としては、自我が無意識の圧倒的イメージに「ホーム」を明け渡すような形になっており、その面では自我の脆弱さが認められるかもしれないが、その背後に、簡単に分けてしまわず、すべてを受けとろうとする強さが内包されている可能性がある。その場合、自我の力がつくとき深い洞察が得られるものと考えられる。

こうした、あり方をとる場合は、自我が他性に身を任せているような、未分化状況であると考えられる。自他の区別が未分化ではあっても、未分化中にある「自」性的な面を揺るがされることで、何らかの「違和感」や「苦しみ」のような萌芽的体験が生じることはありうる。それは、自他未分化であるだけに、明確なネガティブな像を結んだりするといったものではなく、不意に訪れる、漠然とした暗い雰囲気や、崩壊的体験のような、未分化で不明瞭で得体のしれないネガティブ・イメージとして体験されると考えられる。

また、自閉症の場合は、統合失調症の場合とは、体験の性質や質感には細かな違いがさまざまにありうると考えられ、同じというわけではないが、一方で、自と他の区別にまつわる、自我の未確立の問題という点では共通項が見いだせることについては既に述べた。この場合も、自他の未分化のため、漠然とした暗いものや崩壊感を感じる場合がありうる。

こうした未分化なネガティブ・イメージの兆しが見られる場合は、自と他の分化が少しずつ生じていることを示していると考えられる。しかし、このような段階で、自我がネガティブ・イメージに入っていくようなことは、自我が沼地に足をとられるようなことになりかねない。かといって、単にそっとしておくということではない。まずは、自と他の分化のプロセスを支え、自我のまとまりを得ていくことが先決となる。それには、クライアントが、漠然としたネガティブ・イメージ体験に対して、どうすると少しでも落ち着けたり、落ち着かないまでもマシになったりするのかが、クライアントの心的感覚でつかみつつ対処するのを支えることが重要であろう。このクライアントの内的な「ものさし」のような心的感覚を大切にすることは、実は、そういう水準での、クライアントの自我と自己の間の、言語を超えた対話状況を支えることにつながると考えられる。

c. 妄想／自己関連づけ

木村の自己論や存在構造論においては、イントラ・フェストゥムはそもそもの自他未分化な根源的自発性そのものの性質の契機やそれに軸足をおくあり方であり、それそのものの先鋭化は、ノエマ化の難しさを生み、ノエマ化されるとしても、今・この一瞬一瞬において自らを突き動かすような衝迫などの体感や感覚といった、中身と輪郭のある像を伴いにくい、はたらきのノエマが生み出されることが考えられる。しかし、木村においては、根源的自発性は本来的にアンテ・フェストゥムの未知次元に向かっている本質追求的性質が備わっていると考えられている。また、イントラ・フェストゥムは、根源的自発性の「今・ここ」の瞬間性により軸足をおくものであり、例えば①と絡み合うことで、統合失調症親和的な「妄想」性が加わると捉えられている。

木村の論を敷衍すると、未知次元における自を捉えようとするアンテ・フェストゥム的な動きと、その都度の現在における根源的自発性のはたらきに即自的な、イントラ・フェストゥム的な動きが、重なり合って生じ、ある種の強いインパクトをもった直接的体験が生じるものの、その時点では捉えきれないために、ある種の近似物としての像や関連づけが生み出されると考えられる。

ユングの論を敷衍して捉えれば、無意識である自己が非常に活発に活動し、さまざまに周囲の刺激をキャッチする一方、それに揺るがされ、一瞬一瞬、衝迫に突き動かされるような中、それに圧倒されながらも、自我が何とかつかもうとすることによって、妄想的イメージが生まれるものと考えられる。つまり、妄想は、自己の体験を自我がつかもうとして生み出された、現時点での自我のモノの見え方であり、自我のまとまりを作り出そうとする努力という側面があると言える。妄想は、自我にとって、イメージとしてのまとまりが得られるほど、自我にとっての親和性が増すが、自我が圧倒されるほど異質性が増すと考えられる。妄想は、自我が圧倒される度合いが強いほど、自我がこれまでつかんできた既存性を超えているという意味で「他性」を帯び、共同体で共有されるような常識性を超えているという意味で「未知性」を帯び、言語では捉えきれない次元のイメージであるからこそ、「妄想性」を帯び

ると考えられるからである。しかし、そのことは同時に、「既存の」「今までの」自我を超えた、「新しい」自我が生まれる萌芽であり、自己との新しい関係が生み出されつつある過程にあるということでもあると考えられる。

したがって、「妄想」は、単なる症状として捉えるべきではなく、自我が自己との対話によって生み出したイメージであり、その時点でのモノの見え方のイメージとして大切に見ていく必要がある。その際、イメージを「現実」と照合して捉えたり、イメージの「ネガティブ／ポジティブ」に呑まれるのではなく、イメージの中に入っている視点を受けとめることが肝心である。表現される妄想は、①クライアントの心的課題の性質や、②心理療法や心理臨床の場でおきていることや、セラピストとの関係性における問題の性質について、クライアントの心がキャッチしたものを伝えてくれていることが少なくない。

また「妄想」は、大きく捉えれば、自己関連づけのはたらきの一つに数えることができよう。この視点に立てば、「妄想」の水準にあたる精神病圏の自己関連づけから、神経症圏や発達障害圏や健常圏に至るまで広範に見られる、「妄想」の水準には至らないけれども「妄想」的な要素が認められるような自己関連づけまで、スペクトラムとして捉えることができる。認知症や手術などの身体的侵襲を受けた後などに生じうる「せん妄」もこれと類縁のものと考えられる。上に述べてきたような「妄想」へのアプローチは、「妄想」的な要素が認められるイメージへのアプローチにおいても有用である。

d. 問題行動

a.～c.で見てきたように、自他の区別の問題により、自我が未成立もしくは脆弱である状態においては、自己である無意識がキャッチしているものを、自我がイメージとしてつかむという点に脆弱性があり、その中で、自我のまとまりを得ようとするのが、b.「無反応」に見える状態像を生んだり、c.「妄想」やそれに類した体験として捉えられるような症状を生んだりしうると考えられる。

前者の場合については、「無反応」に見える状態にある中で、「自」性が脅かされ、未分化なネガティブ・イメージが、例えば、漠然とした暗いイメージとして体験されたり、急激な崩壊感として体験されたりすることがありうる。こうした対象化しにくく、必ずしも、目の前に見えるような形ではイメージが立ち上がってこないために、自覚しづらい、いわば背後霊的なネガティブ・イメージが生じている時に、それに突き動かされるように、行動を起こすことがありうる。急に「自」性を脅かされるように感じて、そこから逃れ、「自」性を辛うじて守ろうとするような行動が、周囲にとっては、場にそぐわない問題行動に映るといえる。

後者の場合は、前者よりも、自我がイメージとして心的体験を受けとめている面があり、体験がある種の像をとりつつあるが、自他未分化な見え方で、かつ、共同体的な常識を超えたイメージの見られ方である場合に当たるが、こうしたイメージ体験によって、行動がとられる場合がありうる。周囲には、その文脈が見えていないために、行動の意味がわかりにくいことがありうる。また、行動の背後にある、妄想や妄想的要素の強い心的体験は、共同体的な常識の網の目では掬えないような、現象の諸側面や心的体験を捉えている面も含まれている場合がありうる。それは、常識のネガとしての側面であるだけに、常識的な捉え方では理解されず、誤解を受けてしまうようなことも少なくないと考えられる。

問題行動が、反社会的な形をとったり、反生命的な形をとったりするようなことも生じうる。これは自我の確立・未確立にかかわらず、個人にとっては、自と他の分化が課題となっているような局面で生じうる。しかし、一方では、心理臨床の場における関係性を含め、個人をとりまく関係性が、社会の側の盲点を個人に引き受けさせてしまうような形を反復してしまうようなことも少なくないように思われる。このことは、個人における自と他の分化を困難にするばかりか、さらに追い打ちをかけ、問題行動につながってしまう場合もありうる。この場合、個人の心的問題というだけでなく、社会の側や関係性における問題へのアプローチとしての側面も含まれている可能性がある。

以上、自他の未分化あるいは区別の困難さの問題において生じていると考えられることと、それへのアプローチについて整理し論じた。従来から指摘されているように、自他の区別の問題にもとづく自我の未成立や自我の脆弱さのために、内界-外界といった構造が成立しにくく、不安定であるために、内面を対象化して捉え、その再編の作業を抱えていくことが難しいという点はある。ただし、簡単に自我としてまとまらないような、自我を超えた、無意識の次元、自己の次元において、その都度の現在において捉えられているものを、直接間接にうけとめ、心理臨床の場の視野に入れ、抱えていくことはできる。そして、自他の区別の萌芽をうけとめ、その都度の自我のまとまりの萌芽を支えていくことはできる。そのようにして、クライアントの無意識的自己において、自我のまとまりが生まれてくることによって、少しずつ、自我と無意識の対話構造が生み出されていく可能性があると考えられる。その際には、通り一遍の、共同体の価値観を借りて捉えたものではないだけに、力強い個性化過程が生じる可能性があると考えられる。その実践例を通しての検討については、また別の機会に論じたい。

謝 辞

事例の部分的記載についてご承諾下さった A 男さんと B 男さんに心より感謝を申し上げます。

引用文献

- Asperger, H. (1944). Die 'Autistischen Psychopathen' im Kindesalter, *Archiv für Psychiatrie und Nervenkrankheiten*, 117, 76-136.
(Asperger, H. (1944/1991). 'Autistic psychopathy' in childhood. In Frith U (ed.). *Autism and Asperger syndrome*. Translated by Frith U. Cambridge: Cambridge University Press, 37-92.)
- ブローラー, オイゲン Bleuler, Eugen (1998). 人見一彦監訳, 向井泰次郎, 笹野京子訳, 精神分裂病の概念-精神医学論文集 Beiträge zur Schizophrenielehre, 学樹書院.
- Grandin, T. (2004). *Animals in Translation: Using the Mysteries of Autism to Decode Animal Behavior*, Scribner.
- ユング, C. G. (1907, 1908, 1915). 安田一郎訳(1989). 分裂病の心理(新装版), 青土社.
- Jung, C. G. (1921/1971). *Psychological Types*. CW 6, Princeton, N.J.: Princeton University Press.
- Jung, C. G. (1928-1943/1953). *Two essays on analytical psychology*, CW 7, London: Routledge & Kegan Paul. [Jung, C. G. (1916). Über die Psychologie des Unbewussten, Zürich. (高橋義孝訳 (1977). 『無意識の心理』人文書院.)
- Jung, C. G. (1946).: *The psychology of the transference*. C. W. 16.
- Jung, C. G. (1951/1959).: *Aion: researches into the phenomenology of the self*, CW 9-2, London: Routledge & Kegan Paul.
- Jung, C. G. (1955-56).: *Mysterium Coniunctionis*. C. W. 14.
- Jung, C.G.; recorded and edited by Aniela Jaffé (1961/1963). *Memories, Dreams, Reflections*. New York: Pantheon Books(a division of Random House). (ヤッフエ編, 河合隼雄・藤縄昭・出井淑子訳(1971). ユング自伝 1 -思い出・夢・思想-, みすず書房).
- Jung, C. G. (1964). *Man and his symbols*, London: Aldus Books.
- 河合俊雄 (1998). ユングー魂の現実性ー(現代思想の冒険者たち 3) 講談社.
- 河合俊雄 (2010). 対人恐怖から発達障害までー主体確立をめぐる, 河合俊雄編, 発達障害への心理療法的アプローチ, 創元社, 133-154.

- Kanner, L. (1943). Autistic disturbances of affective contact. *Nervous Child*, 2(3), 217-250.
- Kanner, L. (1944). Early infantile autism. *The Journal of pediatrics*, 25(3), 211-217.
- 木村 敏 (1974): 妄想的他者のトポロジイ. 分裂病の精神病理 3, 東京大学出版会, pp. 97-121.
- 木村 敏 (1976a): 離人症. 現代精神医学大系 3B 精神症状学 II. 中山書店, pp. 109-143.
- 木村 敏 (1976b): 分裂病の時間論: 非分裂病性妄想病との対比において. 笠原 嘉(編). 分裂病の精神病理 5, 東京大学出版会.
- 木村 敏 (1976c): いわゆる「鬱病性自閉」をめぐる. 笠原 嘉(編). 躁うつ病の精神病理 1, 弘文堂.
- 木村 敏 (1979): 時間と自己・差異と同一性: 分裂病論の基礎づけのために. 中井久夫(編). 分裂病の精神病理 8, 東京大学出版会.
- 木村 敏 (1980): 癲癇の存在構造. 木村 敏(編). てんかんの人間学, 東京大学出版会, pp. 59-100.
- 木村 敏 (1981a): 鬱病と躁鬱病の関係についての人間学的・時間論的考察. 木村 敏(編). 躁うつ病の精神病理 4, 弘文堂.
- 木村 敏 (1982a): 時間と自己. 中公新書.
- 木村 敏 (1982b): あいだと時間の病理としての分裂病. 臨床精神病理, 3.
- 木村 敏 (1984): 癲癇の人間学. 秋元波留夫, 山内俊雄(編). てんかん学, 岩崎学術出版社.
- 木村 敏 (1985): 直接性の病理. 弘文堂.
- 木村 敏 (1988): あいだ. 弘文堂.
- 木村 敏 (1998): 癲癇者の人間学的精神病理学. 松下正明(編). 臨床精神医学講座 9 てんかん, 中山書店. 465-471.
- 松下姫歌(2005). 精神病院での心理臨床におけるバウムの意味について, 山中康裕, 角野善宏, 皆藤章 (編), 創元社, 248-275.
- 松下姫歌(2010). 「人生の正午」と個性化の過程: ユング (Jung, C. G.), 成人発達臨床心理学ハンドブック 一個と関係性からライフサイクルを見る一, ナカニシヤ出版, 14-18.
- 松下姫歌(2012). 心的リアリティを見出す視点からみた心理査定, 岡本祐子・兒玉憲一編, 心理学研究の新世紀 第4巻 臨床心理学, ミネルヴァ書房.
- 松下姫歌(2019). 心的現実感と離人感 一質問紙と風景構成法から見る新たな心理アセスメントへの展開, 創元社.
- 西平直喜(1988). 青年心理研究の直面する課題, 西平直喜・久世敏雄 (編), 青年心理学ハンドブック, 3-42, 福村出版.
- 野間俊一(2012). 身体の時間 一〈今〉を生きるための精神病理学, 筑摩選書.
- 岡田努(1988). 学生相談からみた現代青年の特徴. 文教大学保健センター年報 8, 24-26.
- 岡田努(1989). 学生相談からみた現代青年の特徴第2報. 文教大学保健センター年報, 9, 18-21.
- 岡田努(1993). 現代の大学生における「内省および友人関係のあり方」と「対人恐怖的心性」との関係, 発達心理学研究, 4(2), 162-170.
- 田中康裕(2017). 心理療法の未来 一その自己展開と終焉について-, 創元社.
- 内海健(2017). 自閉症スペクトラム (ASD) の精神病理学 一特に統合失調症との違いについて, 日本医事新報 No.4852 2017.4.22, 31-36.
- Weizsäcker, V. v. (1968). *Der Gestaltkreis : Theorie der Einheit von Wahrnehmen und Bewegen*, Stuttgart : Thieme.
- Williams, D. (1998). *Autism and Sensing: The Unlost Instinct*, London: Jessica Kingsley Publishers; 1st edition.
- Wing, L. (1995). *Autistic spectrum disorders: An aid to diagnosis*. National Autistic Society.
- Wing, L. (1997). *The Autistic Spectrum: A Guide for Parents and Professionals*. London: Constable & Robinson Ltd.
- 山田和夫・安東恵美子・宮川京子・奥田良子 (1987). 問題のある未熟な学生の親子関係からの研究 (第2報) : ふれ合い恐怖 (会食恐怖) の本質と家族研究. 安田生命社会事業団研究助成論文集, 23, 2, 206-215.
- 山中康裕(1976a). 早期幼児自閉症の分裂病論およびその治療への試み, 分裂病の精神病理 5, 東京大学出版会, 147-192.
- 山中康裕(1976b). 精神分裂病におけるバウム・テストの研究, 心理測定ジャーナル, 12 (4), 18-23.